

麻生路郎主宰

# 川柳雑誌

四月號



大正三十五年三月五日 禮拜三 第三卷四月號 (第一頁) 發行 昭和十一年四月一日 發行

本誌の刊行は保有證新開紙法に據る



要必非是瓶一は家一

皮膚障害・外用薬

# 仁丹の靈泉

○全國到る處の藥店にて販賣す

◎スポーツの外傷に殊効!

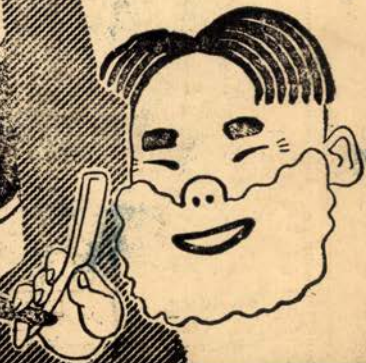
龍材治主の劑本

驚ずれ 傷よりマク  
 たされ 手足あれ  
 切り傷 吹出もの  
 打傷に きき  
 やけど あせも  
 虫 咬 疹  
 水 虫 いんきん  
 ひもやけ じん  
 たむし 癩癧と

驚ずれ 傷よりマク  
 たされ 手足あれ  
 切り傷 吹出もの  
 打傷に きき  
 やけど あせも  
 虫 咬 疹  
 水 虫 いんきん  
 ひもやけ じん  
 たむし 癩癧と



所兼堂博下森・館本丹仁藥中徳





# 川柳観大會

(事務)

増位 山本 雨田 柳 西田 井 須 生 田 梨 栗 住 田 鹿 栗 須 崎 豆 秋 須 永 澤 雨

大阪道頓堀の眞つ只中に今を盛りと咲き誇つてゐる櫻の下で一日、私達川柳家の櫻狩りを開催いたします。當の櫻と華艶かぎりなき麗人バーナートとがその美を競つてゐます。電車賃のいらぬそして手軽な観櫻宴は正に近代人ふには川柳を絶好の催しものと思ひます。川柳家の皆様は勿論のこと友人を御誘ひ合せの上奮つて御出席下さい。

日時 四月十二日(日曜)午後一時開會六時閉會  
会場 大阪道頓堀 キヤバレー マルタマ路上(全部借切)

兼題 柳 談 二句 「この頃の僕」 麻生路郎先生 選  
「櫻」 麻生路郎先生 選

各ターブル少女歌劇管絃樂團は特別演奏  
店內樹に吊して一般の觀覽に供するため短冊揮毫。

●●●●●  
路郎孟及川柳マツチは例月の通り呈上。  
當日記念寫眞を撮影。  
我社の奉仕的 準備の都合上大體の参加人数を知り得ない存じますがなるべく前日迄に事務局宛御申込を下されば幸甚に存じます。

## 主 催 川柳雜誌社

大阪市天王寺區上沙町一丁目五一

(電話南六四四番)  
句 柳 係 青 水 史 呂

### 川柳雜誌社關係四月旬會案内

| 主 催                       | 日 時   | 場 所     | 兼 題       | 選 者 | 會 費      | 雑 係      |
|---------------------------|-------|---------|-----------|-----|----------|----------|
| 御池橋支部                     | 夜八時   | 西區四ツ橋南  | 恵み        | かほる | 選 不 要    | をい       |
| 大阪朝報社                     | 夜七時   | 日本橋區    | 茶柱        | 汀柳選 | 二十錢      | 兼題及席題の天郎 |
| 第七回旬會                     | 夜七時   | カナメ喫茶店  | 小説、マツチ    | 不要  | 兼題及席題の天郎 | をい       |
| 竹原支部                      | 夜七時   | 町田承春居   | 温泉、夜ふか    | 不要  | 會 歡 迎    | 承 春      |
| 大鐵支部                      | 午後五時  | 大鐵局俱樂部  | 入場券、夜ふか   | 不要  | 會 歡 迎    | 承 春      |
| 天王寺支部                     | 夜七時   | 大原研究所裏  | 流言、豆秋選    | 十錢  | 會 歡 迎    | 承 春      |
| 竹原支部                      | 二十五日  | 的場公園    | 女、手帳      | 一圓  | 觀 光      | 會 承 春    |
| 兵庫支部                      | 夜二十七日 | 兵庫和宮通   | 無口、明珠選    | 十錢  | 會 承 春    | 承 春      |
| 吹揚吟社                      | 四月月上旬 | 米屋町     | 貯蓄銀行、街路樹  | 十錢  | 會 承 春    | 承 春      |
| 今治支部                      | 四月下旬  | 米屋町     | 貯蓄銀行、壁、路樹 | 十錢  | 會 承 春    | 承 春      |
| 道頓堀支部                     | 夜十七時  | 南區屋敷町   | 爪楊子       | 二十錢 | 會 承 春    | 承 春      |
| 上町支部                      | 夜十七時  | 南區大寶寺町  | 青葉、レコード   | 二十錢 | 會 承 春    | 承 春      |
| 御旅支部                      | 夜二十九日 | 西區新町橋電停 | 路郎選       | 五十錢 | 會 承 春    | 承 春      |
| 支部旬會は必ず前月中旬迄に決定して御報告願ひます。 |       |         |           |     |          |          |



# 川柳雜誌 第十三卷 第四號 四月號目次

文苑

黑板に書く

麻生路郎 (四)

武玉川二篇研究 (三十四)

梅本秋の屋  
森東魚 (二)  
蛭子省二

川柳時評 東京から (四)

高須啞三味 (二)

「六厘坊十句」の再検討 (二)

木村半文錢 (二)

佛蘭西俳諧の鑑賞 (上)

鈴木小寒郎 (二)

旅鴉と干潮 (句評)

安川久流美 (四)

病人覺え書

住田亂耽 (五)

色ページ

大坂が船で歸れば

柴谷幸二郎 (三)

金色 蝙蝠 蝠

不朽洞 (四)

手紙

食満南北 (五)

名家の話 (三)

鳥山一步 (七)





街頭インチキ風景……………西田艸樂……………(三八)  
春にふさはしい話……………平井春光……………(四〇)

創作

川柳塔……………麻生路郎選……………(六)

近作柳樽……………麻生路郎選……………(四一)

粒々集……………濤明・鞍馬・一徹・柳秀……………(三三)

日本名所名物川柳……………山川紫明選……………(三〇)  
(京都の巻)……………朝倉大鱗書……………(三五)

一路集……………橋本綠雨選……………(五六)  
物辛……………須崎豆秋選……………(五七)  
干抱……………路郎・艸樂・汀柳整理……………(五九)

各地柳壇…………………………(六六)  
柳界展望…………………………(六六)

編輯の窓……………雨迷・汀柳……………(六八)  
本社關係の人々…………………………(六七)  
川柳書架(五八)……………(二九)  
表紙 紙 畫……………富本 憲吉……………  
……………川柳家の戸籍調……………綠 雨……………(五九)  
……………本社關係句會案内…………………………(二)  
……………川柳雜誌案内…………………………(七〇)  
……………表紙 題字……………路郎主幹……………

# 黒板に



廣田首相

石屋の息子が總理大臣になつた

と云つて石屋がよろこんでゐる。

餅屋の息子が總理大臣になつたら

餅屋がよろこぶだらう。

俳人青嵐が大臣になつたので、

俳人がよろこんだ。柳人××が大

臣になつたら柳人がよろこぶに違

ひない。

が、そこを見渡しても大臣に

なれさうな柳人がゐない、いつそ

のこと廣田首相に川柳をつくらせた方がつとり早

いだらう。そしてよろこぶことにするか。

私は曾て大阪驛で原拓相に拙著「川柳漫談」をデジ

ケートして禮狀はいたゞいたが、遂に一句に接する

ことが出来なかつた。

さう易々と川柳が出来やう筈もないが、爲政者も

聲明や議論ばかりしてゐず時々川柳を作つて見る

位なよゆうは持つてもいいだらう。

## 非常時の非常時といふ聲明書

×

近ごろの流行語の一つに「今からでも決して遅く

はない」といふ言葉がある。二・二六事變の諺告<sup>1</sup>

兵に告ぐ<sup>2</sup>の反響の幅の廣さである。

## 諺告<sup>1</sup> 兵に告ぐ<sup>2</sup>

勅命は發せられたのである、すでに天皇陛下の御命令は發せら

れたのである、お前達は上官の命令を正しいものと信じて絶對

服従して誠心誠意活動して來たのであらうが。天皇陛下の御命

令によつてお前達はみな原隊に復歸せよと仰せられたのである

この上はお前達があくまで抵抗したなればそれは勅命に反抗

することとなり逆賊とならなければならぬ、正しいことをして

ゐると信じてゐたのにそれが間違つてゐたと知つたなれば徒ら

に今までの行がかりや、義理上からいつまでも反抗的態度をと

つて天皇陛下に背き奉り逆賊としての汚名を永久に享けるやう

なことがあつてはならない。今からでも決して遅くはないから

直に抵抗をやめて軍旗の下に復歸するやうにせよ、さうしたら

今までの罪を許されるのである、お前達の父兄は勿論のこと國

民全體もこれを心から祈つてゐるのである、速かに現在の位置

を捨て、歸つて來い。

後世の柳人が明治と大正と昭和の時代思想の變遷を知る好資料

として、この諺告を掲げて置く。

## 今からでも遅くはないと酒のこと

×

情炎都市大連の無軌道戀愛獵奇事件の女主人公藤森勝美が陽春

四月に旅順の刑務所を出所するといふので、抜目のない各雑誌社

ではその手記を獨占しようとして調策する、カフェーやダンスホ

ールでは是非自分の店へ引張り込んで宣傳効果<sup>1</sup>〇〇%のマネキ

にしたがつてゐる。何處までも怪しからぬ世の中ではある。

戒嚴司令官 香 椎 浩 平





相 織 場 馬

# 書 麻 生 路 郎

女囚勝美膝の聖書を手放すな

賣らんかなの雑誌女囚の手記を待ち

彼の女のために愚作を捧げて、後半生の淨化を祈る。

もう選挙や疑獄の事は云ひたくないが、選挙違反

の容疑で大阪府下だけでも二千人以上引つ張られ、

二百人以上刑務所に收容されてゐる。いつもよりタ

チの悪い選挙だつたと云はれてゐる。およそ意味な

き肅選ではあつた。それだつたらあんなに多額の公

費を使つて、公務の停滯をさしてまで肅選などをす

べきではない筈だ。その見透しのつかぬ爲政者の責

を思はねばならぬ。候補者やその周囲の人達が何れ

も知れねばいゝ主義が徹底してゐたのである。良心

とは何ぞやである。ソレではハン

ニや王仁三郎を笑へまい。

## 選挙違反あの料理屋

### の灯を思ひ

×

學校に椅子がないので、試験地獄の悲鳴が絶えない。そんなまですて勉強をすなといふ文部大臣が一人位出て來てもよさそうだ。

重役の父と出てゆく二部教授

大毎の春の野球の寫眞に木に人間が鈴なりになつてゐるや、

WCの屋根に目白押しに押しならんでゐるのや、満員で鐵扉に押し

戻され、甲子園まで來て、ラヂオ聴取者になつたり、モウゝ

と白煙をあげるスタンド火事に乗じ坐席の奪取を企てる野球ファ

ンの心理などはどうかと思ふ。

## 父の計をスタンドで知る野球ファン

×

石が流れて、木の葉が沈む世の中では、いくら國寶の高橋さん

でも、どうすることも出来なかつた。

五・一五事件の時に私は

## 待つたなしの歩に刺されたる犬養毅

と詠んだが、高橋藏相は桂馬のふんどしにかかつたような鬱じめ

さである。

代り合ひまして、代り榮えがあるかないか、貧すりや鈍する階

級にあまり好意を持つてゐるにない馬場藏相、早くも増税案で

二天作の五と割切るつもりらしい。

郵税や煙草税で大衆をなやます考へ方はあまりに常識的で所謂

非常時の増税法ではない。

それよりは餘り珍らしくもないが、子なき税、養妾税、野球觀

覽税、ゴルフ税、麻雀税等々ヨユーがあつてブラ／＼してゐる

連中からシコタマ徴収するがいゝ。

## 増税を論じバットを投げ捨てる



# 川柳塔

路 郎 選

生田翠夢

置炬燵女のひざがせまるなり  
情熱の化身となつた汝が唇よ  
かい抱けば春は女の肌より

麻生霞乃

扇子まで妾へ先に選ばせる  
鶯のすり餌ばかりに飽きもせず  
牡丹雪はらく旅にゐる心  
お彼岸の龜にも無沙汰してる也  
水仙白く我をいましむ

増位汀柳

教科書を賣つて煙草に代えました  
春雨の中に消えたは片おもひ  
聴き忘れたことを聴きたい人は亡し  
人生の迷路つらぬくツバメ號  
夢の中でわかい女のこえも聞き  
熱と力と涙があつて世に遅れ  
たはれ男のたはれ言葉に馴れし身の  
死んでいつた友をしあはせとも思ひ  
街は春そしてお金がないのなり



橋 本 緑 雨

納税にことしも同じ額になり  
三十の女となつて手切金

○

關 本 雅 幽

噓も方便じやないかと叱られる  
床の間に埃となつて世に出でず  
苦勞話しとなり襟足のむごたらし  
どれぐらい持つて居るのか金々と  
自作農ばかりの村の川の水  
話し好きな病人さんで困ります  
それとなくあたつてくれと酔ふての話し  
薄月は遊びあきたる眼で見られ  
瘠せてみたい肥えてみたいが夫婦なり

荒 井 英 賀 夫

妹の意見しやくとは思へども  
色事でくびになつたとも云へず

西 村 明 珠

子が病んでゐても會社は容赦せず  
發奮をして仲居にと成り下り  
あみものが何んでも出來て嫁きおくれ  
バリカンも頸すじへ來て嫌がられ  
尻切れの様な話で記者歸へり  
憎くまれてゐると知つたらすつと立ち  
赤いものといへば吾家にチュールッブ  
働らいてゐて花盛りなど知らず

喜 多 春 秋

愛妻へ子供のやうな無理ばかり  
喧嘩してひとりになつた長火鉢  
ハイキング雲と線路の景を行き

ハイキング一景

しつこする子についてゐる男親  
氣がすむといふことの又おもしろし

竹内機見女

春の旅別れの旅もあるのなり  
ひとりおり立つ驛の山の氣  
君かとぞ思ふマスクの人多き

岡田某人

團體旗奈良は三條大通り  
趣味の會あんだも養子だしたんか  
丸刈の男自説に死嚙み付き  
ごましほでたばこや主人元官吏  
強壯劑利き相な値へ手が出せず  
胃酸過多意見をすぐに引込める  
めしの香へ三等郵便局正午  
總選舉  
肅然と一票俗な名を記し  
二月二十六日  
出世してなくてよかつた異變談  
木婚  
添ふて千八百餘日膳のしみ

須崎豆秋

どんよりと雪流言は底を這ひ  
替へにゆく百圓札は人のもの  
弔電を読む一役をあてがはれ  
おもしろくみんなの聲が鉦に合ひ  
エキストラ、パスを一枚づゝもらひ

二二六事件の號外を見て(二句)

年寄の寝ごみを襲ふ戦術か  
ぼたん雪あゝ東京は戦時なり

朝田新水

船頭の色に落ちつく冬の水  
何氣なく見るは他人の妻の手よ  
夕陽冷めたく五十錢を握り締め  
應接間かゞむ男となる弱さ  
大喰ひの役に立つ日の夏祭  
警察の廊下でさへもコンバクト  
愛人もなくアパートの風の音  
借りて行くこともおかしき戀の金



青木史呂

金屏風借りて來たのでないのなり  
セロを弾く乙女の鼻は高かりき  
春の雨小さき戀の純喫茶  
もの憂さは女もすでに春のもの

市場没食子

小康に看護婦髪を洗つて來  
經濟は既に破局の足を入れ  
有閑の繻く無産運動史  
外交員の方が根負けしてしまい  
生みの親と育ての親が喧嘩をし

中澤濁水

だんくと寢酒の味に老けてゐる  
幸運はめぐらず白くなるばかり  
瓦斯代も減り國境の雪も消え  
しだれ梅要らない枝にばかり咲き  
脱税の出來ぬ暮しを娘と笑ひ

西いわを

大臣になるとは云はぬ立候補  
脚組んで話す向ふもコードバン  
待春賦赤い瓦に白い窓  
スピーカー迷ひ子は可愛い子供です  
使はれの身の使う身を思ひやり  
飛行機の夢をみて居たお嬢様

陸軍記念日

軍國の刀を抜いて空を切る

大鶴喜由

横びんの禿をわすれた蒸しタオル  
嘘云へば嘘でこたえるほんとの世  
わかれともない妓を雀壽司へ連れ  
眼をむいて情婦の否定もたのもしく  
うえ抱瘡もくにさせてる親心  
いやですとつきはなしたは人が居し  
兵に告ぐ  
今からでもおそくない旗幟り

吉田水車

やわらかものを着ての陳情  
早速に涙の出るもおもしろし  
損をした話も見榮の一つにて  
奥さんがあるんでしようと振る氣なり

姫田夕鐘

寄り添ふた妓の心臓を聞いて見る  
十錢の田舎廻りの菊五郎  
菜種がしばし色盲にしてしまひ

二月二十七日

高橋さんも亡くなつたピアノを止しなさい

水谷鮎美

病みの兒の瞳が魂を眠むらせず  
豆炭のにほひ生活の壁があり  
わが住むビルをカメラにおさめたり

歸郷

内風呂の窓三月月に温くもつて

新見世間音

征空の意識はつきり輪を描き  
この良人も若い時には素ッ破ぬき  
先代の濡場そつくり子の舞臺  
あはてないやうにと妾にも漏らし  
新開地すかさず連鎖店が出來

大西八歩

苦行難行大阪辯の子を育て  
二等車に小さく大きく主と従と  
金持てば持つてる丈の意見され  
善人の怒り言葉につまるなり  
パラシュートで降りたく想ふ紀の海や  
相續の中の一つに御ぶつだん

眞田幸捐

氷點下四度に氷屋起される  
ガソリンの臭藝者は門に入り  
訓導も家に歸れば叱られる



植 山 九 天

若禿が話題の種とは淋しかろ  
當選御禮墨が垂つてゐる  
そこら中春が來てゐる告知板  
心にもない嘘世間馴れた嘘  
高等政策とやらに主張をまげさゝれ

後 藤 青 兒

ステキヤワなどゝちぢれ毛寄つて來る  
受附が老境に居て尻重し  
紅雀造花の様に生きて居る  
信用をしてた機械にはねられる  
櫟く金も豫算に組んだ資本主義  
袖ぬらす冬の雨なら雪になれ

廣 原 都 會 人

いのちあるあいだに女知つて置け  
くちづけはつめたしカオールにほふなり

尼 綠 之 助

カーテンの汚れ春は來りけり  
貰ひ風呂隣の惡口言うて去に  
素的な名をつけてやはり貧乏

東京事件(二句)

殺伐な口調お前も逆賊か  
冷靜にかへり早くも歴史とはなりぬ

明 石 柳 次

寝るだけの家へ鼠がゐてくれる  
嫁の顔あまりに近い長火鉢  
標札の白さへ春の陽があたり

濱 田 久 米 雄

頼母子の引けできざまを買ひにやり  
善人の眼が掏摸の眼をまごつかせ  
進んでるまゝ目覺しは鳴つて呉れ  
追憶を櫟る様に陽はかげり  
オーバーの重さに馴れて餘寒へ出

酒 井 大 樓

某事件(二句)

御勅令拗ねて事足る事でなし  
御家騒動には勿體ない機關銃  
護身術初段未だにミスで有り

月 原 宵 明

湯の中に居て賦力屋の顔見えす  
丸木橋想ひ出多く朽ちてゐる  
空想は雲母をつけて歸るなり

宮 内 耕 朗

結 婚

鏡臺へうつゝた俺を見直さん  
靴の音高く今年は働かう

朝日丸甲板にて(太平洋)

水平線よくく見ればまん丸し

朝日丸船中

臺灣へ近づいて來たシャツをぬぐ  
理想通りにゆかぬ生活しも面白し

石 崎 柳 石

觀世音姪らな膝と獨り者  
すぐ惚れてくれたと思ふのも内氣  
生活の餘裕と云ふが時間だけ  
山蔭の札所と知れた鐘が鳴り  
動かない空氣の下の答案紙

宮 岡 白 峯

終電車女給様から口説きに來  
褒められて後ろ向くのも淋しいぞ  
人殺し大砲も要りガスも要り

町 田 承 春

信心の誠、人間からはなれ  
満開の春が誘ふた浮氣なり

後 藤 大 朗

豪家といふ誇蜜蜂が巢をかまへ  
春がすみ世をうつとつゝむなり  
満洲の友の寒さを思ふ梅



尖道湖畔風景

奈良井柳人

白魚を數へてゐるは旅の人  
雀らに見舞はれ乍ら胃を痛む  
黙つても居れず羊羹つまむなり  
折角の期待に叛く顔ばかり

三 鴨 美 笑

春の道馬糞大きく散つてゆき  
獨身は春をすげなく笑つて見  
親などを忘れて見る日戀が勝

中 西 お さ む

往復の復へ爲替がとゞくなり  
單調な一日だつた靴下を脱ぐ  
汽車の屋根世帯やつれをおもわせる  
腕力へ鐵の匂ひがするのなり  
おそろしき美學場末の女給にて  
修養の一つ追ひまくられてゐる

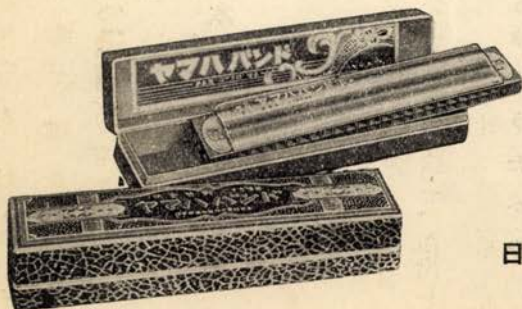
# 蝶 印 「ヤマハ・バンド」 ハーモニカ

ヤマハ バンド ハーモニカの評判は大したものですよ

音 も……質 も……耐久も……意匠も……

申分のないハーモニカとは……

ヤマハ バンド ハーモニカの事



20穴……¥1.50  
21穴……¥1.70  
23穴……¥2.10  
24穴……¥2.30

製造發賣元

日本樂器會社大阪支店

大阪市西區四ツ橋南  
電話新町一〇七三番

# 武玉川二篇研究 (二四)

梅 本 秋 の 屋  
森 子 東 魚 二  
蛭



(607) 古い屋敷で機柵の葉を買

省二 掃除用。「其葉亦細割如線、而爲箒」(和漢三歳圖會)。

秋の屋 箒の外に何にか使用されるのではない歟。古い屋敷といふが腑に落ちぬ。

東 魚 棕梠などは、さうく何處にでもあるわけではない。あの屋敷なら昔からあるのだと云ふので、其處を當にして來て賣つて貰ふのであらう。

(608) 黒雲かゝる焚出しの食

省二 多くの百姓が集り、雨を祈つたのだ。「焚出しのメシ」に眞剣な光景が含まる。

秋の屋 祈雨は動かぬ説である。

東 魚 凄じい光景を焚出しの飯によつて、描出した處が面白い。

(609) ぬれずに戻る傘にうたがひ

省二 あ的时间あれ丈け降つたのに、傘が少しも濡れてゐないのは、どこか寄る先きがあるのだ。近頃外出勝ちであるかと疑心を起す。

秋の屋 妬婦は細微の點にも目を着る。

東 魚 借りた下駄から(洒落ではないが)足がついて、穴を發見された丹治郎も知り合ひの中にある。

(610) 看病の間隔てころもかへ



省二 長患ならん。患者への心づかひから、「一間隔て」である。「やむ人のうらやみ顔や更衣」(凡童)。

秋の屋 細心の婦女の所作である。

東魚 心つかひもあり禮儀もあらう。病人は目の上人なのであらう。

(611) 小判へも鏡の息のあいしらへ

省二 鏡は息をかけて拭ふ。小判へも、そのあいしらへをする。小判への感じは出て居る。

秋の屋 前解に異議は無いが、この小判が大判であつたらばと思ふ。

東魚 小判へも鏡へすると同じやうに息をかけて押拭つてみる。そこに小判の美しさに見入る心持が出てゐる。

(612) 旅たちの跡の坐敷へ日が當り

省二 早朝の旅立ち。跡の座敷は明け放たれてゐて、段々旭が差込む。旅立ち後の森閑さ。

秋の屋 未明に人の旅立をした跡に、朝日が次第に差入るさまで、坐敷に人の居ない光景が能く表現されてゐる。

東魚 佳句だ。

(613) 鹽鳥のおよいだ形に堅く成

省二 鹽鳥は鹽漬にした鳥の事。泳いだ形のまゝ鹽漬

にされてあるのだとの形容で、みごとな物をも思はせる。

秋の屋 遠方に輸送する、雁鴨の類である。

東魚 足が後ろさまに水を掻いたやうな姿のまゝに、鹽漬になつてゐるさまが想はれる。

(614) たまつて警女をすへる明りみ

省二 警女は穴のあく程、見られた事であらう。「つくねんと警女は菊石を數へられ」ゐてたであらう。

秋の屋 女中などが惡戯を企むのであらう。

東魚 罪な事である。が句は面白い。

(615) 燕より一月はやきつばめ口

省二 燕は歳時記で二月のものとされてある。一月早いのだからお正月の謂だ。つばめ口とは食器の内部が赤塗で、外部が黒塗のもの、燕の口に似てゐるからの名稱。お正月用の器具を意味する。

秋の屋 女兒が三味線の稽古本を入れる、布の袋を「つばくろ口」といふが、此の句の燕口はそれと違ふ。

東魚 俚言集覽にも「梔も折敷も燕口なり」、「燕口なる梔の数々」などあり、嬉遊笑覽にも「燕口と云ふもの古きものなり」などある。要するに正月の祝梔の類をさしたので、蛭子氏説の如きものであらう。秋翁の申された、つばくろ口の方は開ける處が大きく三角になつてゐるので

燕の口に見立ての名であらう。

(616) 珍らしく見る旅のからかさ

省二 雨除カツパ、管笠で旅をして居るから、傘を珍しく見たとは長旅びを察せさせる。気分は出て居る作。

秋の屋 廣重の五十三次の錦繪にも、傘数は甚尠く見える。

東魚 城下へ入つて傘を珍しく見たのであらう。

(617) こらへくゝて鏡鉢に泣

省二 お葬式にこらへくゝてゐたが、鏡鉢が鳴りかけて、一時に涙がこぼれ出る。(鏡と鉢とは別物であつたのが、後世一つとなる。響銅製であるから良く響く)。

秋の屋 群馬縣の某僻村で、葬送の行列の中に數人の僧が交り、鏡鉢を担りながら行くのを、私は實見した事があ

る。

東魚 前説通り賛。

(618) 藤の花最う此うへは日も延す

省二 藤は舊三月を主とし四月にかけて咲く。俳諧にては春を日永といふ。故に藤の咲く時季が日永の頂上だといふのだ。

秋の屋 夏至の候まで日は延るのであるが、藤の花の咲く頃が、最も日が長いやうに感ずる。

東魚 これきりの句であるが、何となく気分が出てゐる。

(619) 見附の屏風盃を見ず

省二 金屏風(お祭)を立て、居れば、肴あり盃は付き物であるのに、見附のにはそんなものは見當らぬ處か、「金屏風立て、鐵砲高枕」だ。

秋の屋 江戸時代の日吉、神田兩祭には、氏子の家々では店頭に屏風を立て、酒宴を開くけれども、嚴格の各見附の面番所に於ては、其様な事は出来ぬと也。

東魚 さりとは野暮な屏風である。

(620) 蛸雁木に汐の見合

省二 蛸雁木とは竿に又を附けかいて蛸を集め採る道具。汐の差引を見計つて、蛸雁木でやつて居るのであらう

秋の屋 蛸は鐵製の萬能鉤に似た、柄の短い器具で採收するが蛸雁木といふものを知らぬ。

東魚 蛸河岸の事を蛸雁木と云つたのではないからん。雁木形に切つた鐵板に柄をつけた(小供の砂遊び貝のやうな)ので、蛸を堀るから蛸雁木かも知れぬ。

(追記) あさり雁木に座頭つくはふ(武十二)があつた。

(621) 縮緬も襦子も佛の道しるべ

秋の屋 縮緬襦子の類は、法衣や佛具の幡、天蓋に製作



されるから、佛の道知るべと詠んだことと思ふ。

東 魚 賛。縮緬や繻子の華かな花柳情緒と、麴では悟の道しるべになると云ふ意と偶してあるかも知れぬ。

省 二 前句をみねば断定は出来ぬが、娘が死むで寺へ納めた場合とも解してみてゐた。

(622) 晝寝の顔へ掃かけて見

秋の屋 此の日の長いのに、晝から夕刻まで午睡をしてゐるとは、目に餘る所爲であるから、箒で芥を掃懸けてやらうといふのである。

東 魚 顔へ芥を掃懸けるのはあまりひどい。此の「掛ける」は着手する、はじめる、と云ふ意味であらう。掃きはじめてみたら、起きもするだらうとであらう。

省 二 掃く眞似をしてみた位に解してもよろしからう

(623) 木馬に似たりうどんやの音

秋の屋 麵棒をもつて溫飴を打つ音が、木馬に乗つて動かす音に似てゐる、といふ而已であらう。

東 魚 トン／＼コト／＼云ふ音は、成程木馬の音らしくも、聞かれる事である。比喻にしてからが、ノンビリしてゐる。

省 二 前句の感じを、イカして居る作であらう。「木馬は鞍懸といふ、寶倉に鞍懸はもと鞍をやすむる具なり、

猶たくましよう作りたて、障泥をかけ手綱をつけて、鐙のりのり鞭のあてやうをもならはせり、これ世に所謂くらかけの馬なり云々」

(624) 寒念佛鳥屋の門も野邊の數

秋の屋 寒念佛に出る法師は、全く世捨人であつて、小鳥屋の前を通る時にも、小鳥が高價に賣買される事などは思はず、たゞ鳥の囀つてゐる野邊のやうに思ふ、と云ふ意歟。

東 魚 寒念佛は夜の修行であるから、小鳥の囀つてゐる鳥屋を、想像出来難く思ふ。食料に殺さるべき運命の鳥屋の鳥に對して、野邊送りをする心持ちで、念佛を唱して行くと云ふのではなからうかと思つてゐた。

省 二 「山野に出高聲に念佛を唱ふ」で鳥屋の前では聲高らかに念佛するのであらう。

(625) 手の届くだけはたまして松囃子

秋の屋 江戸時代には、正月三日の詣初を、松囃子と稱したやうである。偕、去年の師走には、手の届くだけ諸方より金品を借倒し、一夜明るとその事は忘れたやうな顔をして、詣初に浮かれてゐると云ふので、これは町人でなく小旗本か御家人達であらう。

東 魚 詣をうたつて門に立つ、瘦浪人ではなからうか

省二 謠初などやるとは、借倒して他に迷惑をかけてゐても、そんな事を何んとも思はぬ根性のあるを云つたものか。再考せむ。

(626) わさびおろしに日の残る留守

秋の屋 唯一人留守する徒然に、厨に置いてある山葵卸に、斜陽の餘光が淡くさしてゐるのを見て、寂寥感するとならん。

東 魚 唐突にわさび卸を描出したのが、充分解らないが、それで一入寂しさが感じられる事は、感じられる。

省二 お勝手の壁に陽が残りつゝある事を、前句事情で山葵卸なる一個の器具を借りて、感じを強めんとしたのであらう。

(627) 提灯か消ると直に突あたり

省二 目明きは不便千萬なものぢや―前句に或は戀でも加味して居るのかも知れぬが、此句丈けでは、そこまで判らぬ。

秋の屋 突然に暗闇になると、物體が目に見えぬ故、何にか衝突するのであるが、戀の意は無からうと思ふ。

東 魚 はッと思ふそばから、直ぐつまづいたりするのであらう。突當りは少し仰山に思はれる。

(628) 脇から見へる公事の近道

省二 あの裁判を脇から考へると、何んだが便利な方法―うまく片附く―がありそうに見へてならぬ。

秋の屋 公事の近道は例の袖の下(賄路)で、脇の方より能くみゆる。

東 魚 前説賛。面白い穿つた句である。

(629) 吉原近く光るからたち

省二 刺のある枸橘の生籬だ。「吉原」に偶意ありはせぬか。江南の橘江北に植うれば、枳となる。

秋の屋 浅草田圃の六郷邸や、入谷村の正澄寺には、枸橘の生籬が有つたかも知れぬ。

東 魚 何となしに面白い句である。偶意も明瞭に説き兼ねるが、説かぬ方が味があるやうに思ふ。

(630) 松風や關の障子の喰違ひ

省二 風にふかれ通して、障子のたてつけも合はぬ。松風だから我慢も出来よう。

秋の屋 障子の破穴より、松風が吹通すので、真中に建る障子を、端の方にやりなどするのである。立附の合はぬのを喰違ひとはいふまい。

東 魚 あべこべに閉めたりしてある、關の風流氣のない障子の立てざまでは、松風もあたらなものだと云ふ心持ちであらうか。



# 川柳書架 (五八)

川柳書架

三浦太郎丸著

▼巻頭に川上三太郎氏の序がある。

▼本句集の跋に、著者自らが次のやうに述べてゐる。

「川柳に鼓舞され、且つ悩むことに依つて私の半世はまことに豊饒だつた。その感激がこの句集「薈」である。

本句集は主として、大正六年より昭和十一年迄の、川柳入門時代二十年間に獲た作品のうち、特に愛着を感じるものゝみ三百六十五句を収めた。(以下略)

▼昭和十一年三月三日發行。菊半截一二七頁 定價五十錢。發行所東京市淺草區壽町三一ノ一四 川柳おもひで吟社

昭和十年 川柳特選集

和田天賦子編著

▼本句集は「昭和九年川柳特選集」の後をうけて刊行されたもの、後半に著者の雜筆が掲げられてゐる。

▼昭和十一年三月十七日發行。四六版和裝袋和綴。一三二頁。定價壹圓。發行所東京市牛込區拂方町一四 川柳俱樂部

## 新刊紹介

文樂人 形圖譜 手ご足

宮尾しげを著

漫畫家で川柳人である著者、しかも凝り性のところへ研究熱が旺盛と來てゐるから、金儲け度外視したこんな本が出来るのだと思ふ。こんな本は文庫のうるほひだと思つた。お馴染の深い著者だけに川柳人は是非一本を買つて欲しい。昭和十一年三月十五日發行、大形八四頁、定價壹圓二十錢、發行所東京市本郷區牛込動坂町一〇四 壬生書院

映畫説明者の芝居

笑ひの百貨店

誕生! いよいよ公演

マデモノナンセンス 殿様と赤坊 吉村晋 原作

文藝部

久松新 吉村晋

因幡八子 伍東宏郎

里見義郎 泉詩郎

木田水童 石井春隆

人見静一郎 寺田幸子

森口ス・ム 松井綾子

いづま櫻子 松井綾子

春海美子 松井綾子

中村小扇 松井綾子

高橋鶴瞳

辨天座川柳

辨天座一家そろつて行くと決め 史呂 辨天座出て昂奮の吐息つき 都會人 クーバーの聲まのあたり 辨天座 春秋 辨天座ならばと母の許しが 出豆秋

道頓堀

弁天座

電話南二七八番

故小島六厘坊



# 「六厘坊十句」の再検討 (一)

木村 半文 錢

## (一) 緒言

「六厘坊十句」と言ふのは、明治三十八年十一月上旬(自記によれば六日)、小島六厘坊自身が自作十句を選び、これを當時の西柳樽寺同人(即ち後の葉柳の人々)に示し、その批評を乞ふた初期の回覧集である。其時の西柳樽寺の人々(回覧順の署名)には木下日本坊、矢野花紅坊、齋藤松窓、川上七厘坊(日車)服部ふくべ、寺西源坊、花谷かく、木谷ひさご、林七笑、森田八厘坊の十氏を擧げてゐるが、事實批評の筆を執つたのは、前記のうち、日本坊、花紅坊、松窓、七厘坊、ふくべの五氏に過ぎない。他の五氏は回覧された形跡がないやうである。

六厘坊の自序は次の如くである。

序

大阪柳樽寺は創作に比して評論が振はない、此際松窓の十句集回覧などは非常に有益な事じやと思ふ、僕も眞似がして見たくなつて僕の近作中一二を撰んで諸子の批評を求めやうと思ふ、この集が即ちそれである。

こゝに撰出した十句は必しも余の得意の句ではない、中には僕の嫌いなものもある、兎に角思ひ出した句を書きつけた迄で別に十句を撰んだと云ふのに意味はないのである。

終りに二三枚の白紙をのけて置いたからこゝへ總評とでも云ふものが書いてほしい、猶六厘坊の句に就いてもと云ふ風なのもよい、ほめられても嬉しい、けなされても嬉しい、兎に角何か書いてもらひたい。

この批評は新編柳樽第四へ抄録するつもりであるから可成精細に願ひたい。

巻末に表をこさへて置いたから句のよい順に、一、等から十、等まで、階級を付けてもらひたい。

批評と手つゞきは早きを尙ぶ。

終十一月上旬

六厘坊記

巻末に「二回、回覧するものとす」との規定を自記してゐるが、事實は最初に一回だけ前記の五氏に回覧したのに過ぎぬ。即ち十一月六日に姫路鷺城新聞社の日本坊へ送り、同氏は「七日入手同日お次へ」とある通り和歌山縣那賀郡岩出村の花紅坊へ送り、同君は八日に受取り九日に京の松窓へ發送してゐる。松窓は十日の朝に受取つて正午に大阪の七厘坊へ回し、七厘坊は十一日に受取り、即日六厘坊の手許へ返却したものと想像される。ふくべの批評はあるが東京より返却して來て、



再覽に附した時の執筆である。

以上の順序で僅々一週間足らずの間に是を同人間に回覧したが、六厘坊は西柳樹寺のみの批評に憚らず思つたのか、是を、そのまゝ、東京の柳樹寺即ち井上劍花坊氏に送り、その一門の人々の批評を仰いだのである。其の事情に就て六厘坊は再び次の如き自序を、前の序文の後で認めてゐる。

「はしがき紙数を増したるとき之をした、む」

この十句集を作つたのはこの六日の事である、いの一編で日本坊へ廻し花紅、松窓七厘と順を追ふて僕の所へかへつて來た句の評判が案外によいので東京の方へも見てもらひたくなつたので、之を劍花坊氏の許へ送る、もしおひまがあつたら文象、駄六、飴ン坊諸先生の許も御願ひ申したい、評は手きびしい程作者に取つては仕合せである評がさんぐであればまた十句作るこれも悪ければ又た十句、こんな事を繰りかへして居るうちには六厘坊も少し川柳家らしくなるかも知れませぬと云爾

十一月十二日

後進

六厘

六厘坊の意志では、劍花坊、文象、駄六あたりの當時東都の大名の、と自他共に許す人々の批評を徴する筈だつたが、駄六や文象は加はず、角戀坊、飴ン坊の兩先輩が劍花坊和尚と共に批評の筆を執つたのである。勿論、飴、角の兩氏が當時柳樹寺の双璧として活躍してゐたのは申す迄もないから、劍花坊和尚もこの兩氏をして起用したのは常道であらうと考へる。

所で、可なり評判が宜かつたので氣を宜くした結果、今度は劍花坊の一門とは對立的立場にある久良岐社に向つて是を送つたやうである。即ち、第三次の序文がそれを雄辯に物語つてゐる。

# 序

この十句集は余の近作を代表せるものなり、十句、諸體の句を集めて同人に示す評判大によし進んで劍先生に送る、評判ちよつとよし、勢ひ込んで古狂、百樹、なぐさ其外の諸先生へ回覧す、久先生にも見て貰はんとすなり、善罵、惡罵余甘んじて之を受けんかな

十二月四日

六厘迂人

六厘坊の意氣が漸次高調しつゝあるを、如

上の三つの序文中に見出す事が出來得る。即ち、第一次の序文には「こゝに撰出した十句は必しも余の得意の句ではない」と告白しながら東京方面の批評が好意的で且つ「天才説」に一致したので氣を宜くしたのか是を反對側（六厘坊自身は對立的に考へてゐなかつたかも知れぬ）の久良岐社へまで送らうとしたのであるが、その時には既に「この十句集は余の近作を代表せるものなり」と公言してゐるそこに彼の自信の裏書が明確にものを言つてゐると思ふ。

斯く勢ひ込んだ豫期に反して、久良岐社の側ではなぐさ一人が批判し、他は是に参加しなかつた。尤も是は回覧したのか、回覧せずに終つたのかその間の消息は明瞭ではない。その點に於て掉尾甚だもの足りなさを感じるが、然し、本句集が六厘坊の柳壞の聲名を翻した代表的な作品であることは、六厘坊が假令「十句を撰んだと云ふのに意味はないのである」と卑下してゐても、價值の上には些の渝りがない。殊に、各人の批評が宜しかつたためにせよ「余の近作を代表せるもの」と自認する以上は、やはり、一エボツクを割せんとする、意識的工作の下に、回覧せしめられ

た諸作であることは自明であらう。と言ふのは六厘坊自身も川柳的には尙ほ暗中摸索の感がないでもなかつた時代だから、各種各體を創作して、他の意見を徴し、自家創作上及び川柳本質的諒解の上に資せんとした一つの試みであつたのである。この事は、本十句集に接する人々の特に留意を要する點である。

要は、さうした六厘坊の意圖の下に組み立てられた十句集であるがために、それに答へた批評者の言葉は、各人各態であることは申す迄もないが、然し、それを綜合して考へると當時の川柳作家が、久しき狂句の遊戲的桎梏から脱して漸く川柳の本體に向つて曙光を認め、眼を拓きかけて來た過程が、如實に分明すると信ずる。

故に、私は此の十句集の一部が既に「葉柳」に抄録されてゐるのに満足せず、敢て、その全部を茲に轉載して當時の柳壇を髣髴せしめたいと意圖する所以である。

最も、進んだ今日の川柳界から見れば、三十二三年も以前の川柳界は洵に幼稚であり、特に、其の批評眼の如きも今日の人々をして何等裨益する點もあるまいが、然し、それはそれとして當時の川柳界の一面を知悉する上

には、回顧的な陶醉よりも寧ろ史的に研究すべき何ものか伏せられてゐるのではないかと、私は考へる。その伏せられたものが何であるかは明言する限りでない。たゞ、さうした川柳の、狂句より獨立した一過程の文獻として、史的發展のあとを探索するよすがと思ひ、本稿を草する事にした。

それで本句集は、先づ六厘坊の十句に就ての諸家の批評を全部詳記し、最後に、私自身の考へを附加して行きたいと思ふ。是は批評の批評になり、屋上屋を架する嫌ひもあるが然し、當時の批評を再認識する事も強ち無意味でない事を自認するから、敢て、私解を附することにした。尤も、私としては三十二三

年前の歴史的回顧となり、記憶に存することは是を詳述して、後の史家の參考に供して置きたいと考へる。昔の人は二十年乃至三十年位で年代的革命が繰返されて來てゐると述べてゐるが、テンポの速い今日では、十年にして一時代の變遷が生じ、而も、それが年々歳々、縮減されて行く傾向がある。それこれ考へ合はすと、今に於て、斯うした文獻を補正校訂して公表して置かぬと、折角の先覺者たちの足蹟が、幾年かの後には埋没される恐れ

がある。それは後進としての我々の義務ではないかと痛感する。

如上の考へから、私は本稿を公表することに決意したので、當時の執筆者としては六厘坊は勿論、劍花坊先生、飴ン坊氏も鬼籍に入り、日車、松窓、ふくべの三氏が今日健在であり、尙ほ日、松兩氏は柳壇的にも運動を續けられてゐるゝが、其他の諸氏は角戀坊氏の「むさしの」に活躍せらるゝ以外は生死、消息不明であるのは遺憾である。尤も日本坊氏は久しく大毎の社會部長として勤務され、關東震災後に退社されたいが其後の消息は私に不明である。

因に本「十句集」は紙數五十枚（内一枚は白紙）の日本紙を綴じた小冊で、最初は三十數枚のものであつたのが、再編の際、増頁して五十一枚に達したものである。題號も最初は「六厘坊十句」とし別に「十句集番外」と傍書してある。この「番外」の意味は、他に西柳樽寺としての十句集があり、それに對しての意味であつたらしい。十句集、五句集又何々集と、いつたやうな回覽誌は、當時の研究方法としての唯一の機關であつたから、可なり此の種の企舉は存在したのである。六



厘坊の十句集は其の意味で、關西に於ては松窓のものに亞ぐ初期の回覽集であらうと考へる。それで、再編して東京へ送る時には「十句集」と單記し、下部へ「番外」の二字を添加してゐるのみである。

さうして二度目の回覽を西柳樹寺のみへした時の序文めいたものが、表紙の裏面へ盛められてゐる。六厘坊の意向を知る上に參考となるから特記しておく。

「二度回覽せんとして

六厘

この句評は新編柳樹に抄録する、然し極く大ざっぱに紹介するのじやから諸子の難に對して一々辯駁する事が出来ない、そこで紙面の餘白にこれを一々かき記して再び諸子に回覽する、異論があればどしどし吐いてくれ給へ」

即ち「新編柳樹」は改題して「葉柳」二卷一號となり、本稿の一部はそれに抄録されたのである。

終に、小島六厘坊は明治廿一年生であるから當時十八歳の少年であつた。

五月は肺を病んで夭折した天才小島六厘坊の祥月である。それで本號から半文錢君の六厘坊十句の再檢討を掲げることにした。

(編輯局)

## 隨想

### 旅鴉と干潮

川柳塔から短評——

安川久流美

増位汀柳君の

さむく／＼とわが部屋でなし旅がらすの句に接して、オーバの襟を立てた冬の旅人を思ふ。旅に出れば燐寸一本さへも「金」であるに較べて、わが家はらくな鍋鹽といふ氣樂さをしみ／＼と感ぜさせるだらう。

この句に孤獨のわびしさがあふれてゐる、さまよふ旅人の雪野原でシグナルの汀に蘇るといつた風な相が描かれてある。

旅がらすといへばとて長谷伸氏の「股旅物」の旅がらすではない、自然的に「旅人」を斯く思ひ切つた表現法にした事は作句の努力である。斯うした句に可也十七字詩といふ内容が盛られて既成川柳の域を脱する疑ひはあるが

「わが部屋」の文字が頗る人事を強めてゐるから決して月並俳句として扱はれぬ聖妙さがある。

旅がらすの主觀的人物が、はつきりと頭に描かれてこの句の下五は頗る擴大な働きをもつた修辭法であると思ふ。

葭乃女史の

貯金箱またひき潮となりはじめは、如何にも女性的、消極的の作句として面白い。「ひき潮」といふ非凡な形容は、歌俳として凡庸かも知れぬが、川柳として又無き觸感である、恐らく「貯金」などいふ題を課された時に斯うした佳吟は生れない、日常の生活から、實感として生み出づるものであらう。

右の二句「川柳雜誌」の二月號から作者の個性吟として表現の巧妙を讃美する者である。



柳 時  
評 柳

### 三月の東京句會

三月の東京句會は、一月二月と句會全盛時代を出現したあとだけに、突如大旋風をくつて、バタ／＼と流會、停會、延期となつたのは、みじめであつた。

大旋風すなはち二・二六事件で、その夜は淨玻璃俱樂部（前號參照）がある筈だつたのが、その早朝例のストームで、その會は勿論けしとんでしまつた。そして、その夜から東京には戒嚴令が布かれ、あらゆる集會は禁止されてしまつた。で、その大體を念のために記して見ると、次の通りである。

## 東京から (四)

高 須 啞 三 味

（下の日は延期した日）

二月廿六日 淨玻璃俱樂部——三月廿一日

三月一日 きやり吟社——流會

同 四日 せんりう社——十三日

同 六日 雷吟社——流會

同 七日 柿吟社——十九日

同 八日 太郎丸句集記念會——四月三日

同 十日 芥子粒吟社——流會

同 十日 天馬吟社——流會

同 十二日 寶グループ——四月十二日

そして、十三日のせんりう社の會からは、どうやらかうやら開會出來たが、せんりう社では、四日の會を十三日にのばした端書を配

つたきり、後の工作を怠つてゐたので、出席者は例月の半分も集らなかつたのは、當時の情勢としては當然であつた。

で、その次の十五日の柳友會の三周年記念大會は、川柳研究社の好意で、わざ／＼十五日といふ日を譲つて貰つたものではあり、名古屋の伊志田孝三郎君、静岡の落合樂瓢君に上京をお願いして承諾を得た後ではありするので、どうかして當日強行したいとあせり、十日ごろから啞三味が四方八方に諒解を得て歩いて、大體さしつかへなしと許されてから、大急ぎで「當日開催」といふ再通知を在京柳人に配つたのであつた。それで、思はずも百



二十人ほどの來會を得て、柳友會三周年を飾ることが出来たわけだが、十三日以後の川柳會を記すと、次の通りである。

十三日 せんりう社

十四日 横濱貿易川柳會

十五日 柳友會記念大會

十六日 同地方柳友歡迎會

十七日 紅懷舊の集ひ

十八日 川柳俱樂部

十九日 柿吟社

廿一日 淨玻璃俱樂部

廿四日 きやりビール會

併し、事實「集會令」が緩和されたのは三月二十日であるから、

廿一日の淨玻璃俱樂部は流石本職と驚いたわけである。とは言へ、

川柳會もかう連日では、川柳家自身も疲れるし、家事にも差支へるわけで、連

日出席した僕と川上三太郎氏は顔見合せて苦笑した。

「もう川柳に倦きたよ」と三太郎氏は、本當にアキ／＼した顔であつた。

「本當に、僕も疲れました」僕は全く疲れてゐた。

東 京 加 ら

これが、戒嚴令下の東京に於ける句會の姿である。地方柳人には恐らく豫想以外であらう。——地方柳人にすれば、目下の東京では句會など到底開けないと考へてゐられるのであらうが、二月二十六日から廿九日の情勢最悪の當時でさへ、「戒嚴令つて、どんなもんです」と言つてゐた東京柳人があるのだから

つあつた。それは、三月十七日に上野驛前の勘兵衛酒屋といふ一杯屋で催された川柳「紅」懷舊の集ひといふのであるが、集る趣旨としては、別に野心的なものではなく、通知の端書に印刷された前書及び發起人は、左の如きものであつた。

川柳紅懷舊の集ひ

## 柳人筆蹟(五)

「川柳研究」主筆

川上三太郎

地方柳人よ、幸ひに御放念ありたしである。

また四月になると、東京には月はじめから大會が續々ある。來月號には、僕もウンと書かして貰はう。

## 「紅」懷舊の集ひ

その非常時の東京に、珍しく長閑な會が一

紅俱樂部を解體して數十年、私達は陰に川柳のゑにしは絶えず今日に至りました。今回、舊交を温める座談會の機會を作らせて戴きたいと存じます。どうぞ御出席を御願ひします。

鈴木 蘭平 齋藤 半七

渡邊苦笑子 石塚迦陀僧

相良 佛 小高 左門

高橋あばせ 太田 武將

田中 庸好 白石 張六

そこで、「紅」の思出を少し辿つて見ると、

「紅」は第十卷の五號を大正十二年八月九日に出し、それが最後になつてゐるのであるからこの案内狀の「解體して數十年」は「十數年」の誤植であらう。數へて見るまでもなく、「紅」は關東大震災で自然解體をしたのである

から、今年は十四年目である。……併し、「紅」の人達が「数十年」と感じるほど、世の中が變つてゐることは、たしかである。

それから、「紅」終刊號の同人の顔觸を見る  
と、美津木(今の庸好)、半七、珍茶坊、茶辨慶、迦陀僧、むせき、張六、孝三郎、蘭平、苦笑子君らであるが、その中すでに茶辨慶、むせき、珍茶坊の三君は故人となり、孝三郎君は名古屋にゐるので

今回の發起人の顔觸は「紅」全期を通じての同人在京者全部と見られるわけで、誰が連絡をとつたか、よく連絡のついたものと、内輪の孝三郎君でさへ驚いてゐたほどである。

その孝三郎君は、實はこの計畫を知らず、柳友會の三周年記念大

會に出席のため、静岡の樂瓢君と共に十五日に上京したので、この會に孝三郎君の出席出来たのは、何方にも都合のよかつたこと、傍からも祝福した。——とはいへ、静岡の樂瓢君も、もとは茶花坊といつて、一時「紅」の同人になつた人なのだが同君はどうにも都合がつかず、十六日の終列車で、残念々と繰返

しながら歸靜されたのは、傍から見ても、如何にも残念なことであつた。

然も、「紅」の會は、ずつと毎月十七日ときまつてゐたのだから、その懷舊の會が十七日にあるのは當然で、たつた一日のちがひで、その會に出席出来ないのは、主人持の悲しさだ……と、樂瓢君は朗かに嘆きながら、その

### 柳 人 筆 蹟 (六)

川柳雜誌社 編輯員  
柳 學 博士

長谷川 一徹

十七日の會で、必ず電車回数券が賞品に出たものだ、だからそれを僕は寄贈しよう……

と、啞三味を通じて、同會へ東京市電回数券を寄贈したのは、いふ思ひつきであつた。

——實際、僕らにしても、張六、十七日、市電回数券を考へると、「紅」以外の何ものでもない氣がするのは、「紅」といふものが、我々

に残しておいた印象の、案外深いのに、今更驚くばかりである。

さて、當日のことを少し報告すると、前記の發起人中、庸好君は社用で旅行中であられず、半七、武將の兩君は何か支障があつて来られなかつたらしいが、他の連中はみな早くから會場に来て、お互同士も珍しかつたらう

が、十數年前の柳友が後から後からつめかけて来るのに、嬉しく挨拶してゐたのは、何か川柳家でなければ判らない人情で、快かつた殊に、今年還暦に當ると聞く張六氏が、來會者の顔を一人々々みつめながら、嬉しげに挨拶を交してゐる情景は、ちよつと涙ぐましくも和かなものであつた。僕は、これが戒嚴令下の東京の會かと、何か錯覺に似たものを感じた位である。

然も、當夜會する者二十九名中、四十歳以下の三十歳代の柳人が僅に五名といふのだから、懷舊の名に相應しい來會者であつた。すると、僕の前に坐つてゐた川上三太郎氏が、突然

「今夜の來會者の齡を合せたら、千にならな



いだらうか」

と言ひだした。斯ういふ場合にフツとかういふ事を考へたり、言つたりするのは、東京柳界では三太郎氏に限るので、その時も「まさか」といふ人と、「いやなるだらう」といふ人とあつて、しばらくガヤ／＼してゐたが

## 沿線花見のお歸りには

是非お立寄り下さい、

柳談に時を過しませう

南海本線玉出驛西二丁

洋酒  
喫茶

## キンケ喫茶室

「それでは、平均年齢はいくつになる？ 若し三十四五になれば、千にはなるぜ」

と、再び三太郎氏に言はれて、みなハツとしたらしい。それから、出席名簿へ年齢を書きこんで貰ふことにして、出席名簿は各自の手許に廻され、それを僕が計算して見た所に

よると、總年齢は勿驚一千二百歳餘となり、平均年齢は約四十二歳であつた。

そこで、僕と三太郎氏とは、現役川柳家の年齢について語りあつたのであるが、我々の先輩は、多くすでに故人となり、生存者はみな六十歳を越えてゐる。それで見ると、その先輩達が、現在の川柳復興に、二十歳前後から關與したと見て、我々の川柳ルネッサンスは、漸く四十年ほど前にしか過ぎないのである。

所が、當夜の來會者で見ても、最高の文豪が氏六十七歳、次が張六、角戀坊兩氏の六十一歳で、五二歳代は僅に〇丸、玉鬼朗の兩君だけ、前記の三十歳代の五人をのぞいた後は全部四十歳代である。そして、その連中が先づ現柳壇での年輩者といふことになつてゐる——これは、いづれ詳しく全國的に調査して見たいと思つてゐるが、大體に於て、この觀察に大差はないと思ふ——して見ると、現在の川柳といふものは、結局まだ總體に二十年ぐらゐ育つた樹でしかないといふことになり川柳ルネッサンスから一期(十年)おいて、現在の柳壇があるといふことは、關東大震災の火焰が、その間を焼ききつてゐるといふこと

になるのではあるまいか等々……いろ／＼考へさせられて、僕には實に意義深い會合であつた。

暗慘たる戒嚴令下の東京で、そんなノンビリした時代になれの會合があつたとは、東京を擾亂の巷と考へてゐた地方柳人には、恐らく意外のことと思ふが、東京柳人たる僕等にとつては、上述の通り却々に有難い會であつたので、こんな會もすでに東京では催されてゐるほど、東京の空氣は和かになつてゐるといふ御報告かた／＼、その會の當事者へも厚く御禮を申上げておく。

### 句會案内發送

### 名簿整理

今度カード式人名簿を新調發送の完備を期してゐますのでこの際お手數乍ら案内御希望の方は住所を左記へ御報らせ願ひます。

大阪市西成區鶴見橋通り五ノ四

句報係 青木史 呂



# 佛蘭西俳諧の鑑賞 (上)

鈴木 小寒 郎

## (一)

フランスで、我國の俳諧精神を輸入して、三行詩に構成し相當なる流行を遂げた一時代があつた事は、つい最近の事であり、俳諧の特殊研究をされた方にはすでに御承知の事であらう。

フランス俳諧詩は、俳諧精神のカテゴリーに徴して甚だ所謂川柳的方面に發展した事を認められるので、少しくフランス俳諧について見て見る事にする。

私はフランス俳諧の研究家ではなし、佛語として文藝用語以上を知るものでない。

唯私は、日本俳諧精神が海をこえてフラン

スで一つの特殊な詩に表現されてゐるといふ事實に即し、それに川柳評論家としての感想を附して行くに過ぎないのであつて、讀者諸君もまた、その程度の受用で満足して貰はねばならない。フランス俳諧詩については、後藤末雄氏の研究文を参照するところ多く、それに私の貧しいフランス文學の知識を彩色したのであるから、自らその一面たるに止る事を附記しておく。

## (二)

一八五八年の日佛條約の成立によつて、あまたの商品と共に、多數の日本美術工業品のフランス市場に異彩を放つ機會が生れた。

日本美術工業品に對する憧憬と愛慕は、いづれの外國においても左様である如く、フランスに於ても、インテリ層の趣味慾を刺激したのである。かの自然主義文學の驍將、エミール、ゾラや、「惡の華」のボードレールや、「北齊」、「歌麿」の著ある、ゴンクール兄弟やキメエ美術館の創立者で有名な、工業家キメエや、名女優サラ、ベルナルなどはその蒐集家として有名である。ゾラなどは、印象派の大家マネーの作品には、いちはやく浮世繪の線が影響したとのべてゐる。

フランスにおける、日本を題材としたものでは、マンデス(一八六三)の詩集「フィロメ



ラにのせた小詩「天照大神」がその嚆矢である  
一八六七年巴里に開催された、萬國博覽會  
の日本派遣員通譯官として、働いてくれた、

レオン、ド、ローニーが、それを契機に日本  
に興味をもち、一八八〇年に「日本文學選」を  
原文から佛譯してゐる。これが佛譯された日  
本詩歌の最初であらう。又エレヂヤの「侍」、  
「大名」といふ詩が刊行された。更に、私達が  
その作品に接する機會の多い、ゴーチエの、  
令嬢、ユヂット、ゴーチエは、折から滯佛中  
の西園寺公と一緒に、和歌八十五首、と古今  
集の序文を佛譯して「秋津島の歌」(Poems  
de la Ibellule)と題して、一八八五年に刊行  
してゐる。

銀行家カーンが日本を愛するあまり、我が  
アカデミクに、教授の世界視察費を醸金  
したのもこの頃である。

一九〇二年には、古事記の英譯で有名な英  
人チエムバレン博士が「芭蕉と俳句」(Basho  
and the Japanese poetical epigram)や、蕉  
門十哲や他の俳句の英譯をなしたものを、フ  
ランス學院の留學生、メートルが、更に佛譯  
してゐる。「ちなみにこの年(一九〇二)の六  
月廿九日、ゾラは自家のストーブの瓦斯漏

出で窒息、不慮の死をとげてゐる」。  
日露戦争の勝利が各國の視點を日本に向け  
させたのは今更のべる迄もない。

この頃にはすでに、フランス人の渡日は非  
常な數にのぼつてゐたらしい、先づ彼らは、  
日本民族の美はしい、自然觀に感嘆の聲をお  
しまなかつた、自國では嘗て、かの「懺悔錄」  
や「エミール」で有名な、ジャン、ジャック、  
ルッソー(一七二一—一七七八)の「自然に還  
れ」によつてやつと、心のオアシスを認識し  
た位の所であり、キリスト教の惡魔の棲家と  
しての、山川嫌避觀念は、依然たるものであ  
つたので、これと對蹠的に見た日本人の自然  
觀を輸入したのは、感性の強いフランス人と  
しては尤なことである。彼らは又、この美し  
い自然觀を、僅か十七字の短詩形式で縱横に  
表現する、「ハイカイ」に一驚したのである。

俳諧の獨自的な偉大さに最も、心ひかれた  
のは、クーシユであつた。彼は一九〇四年  
歸佛と同時に、滯日中脱稿した「日本俳諧詩  
論の刊行に専念した。

そして翌〇五年友人アルペール、ボンサン  
と二人で「水の流れに」と題する、フランス最  
初の俳諧詩を試作し、これを有力雜誌へと發

表した。

以上が、フランス俳諧が作品的に試作され  
るまでのごく大略な概説である。

この以後における諸種の企がたくさんにあ  
るがこれは割愛して、フランス俳諧詩の鑑賞  
に移る事にしよう。

以下の俳諧詩は、多分後藤末雄氏の邦譯と  
思はれるが、その原語を知る事ができぬので  
譯の良否は問題の外である事を是認して置く  
必要がある。(未完)

支那北京料理

佛蘭西風茶房

御宴會に御集合に

市電戎橋電停西御堂筋北角

紅 噉 光

電話南一一八六番

花の宵なつき園へ異人來る 長田晃洲

(一) 祇園

夜櫻とだらりの帯で京の春 浩詩



日本名所  
名物川柳

(京都の巻)

山川紫明選  
朝賀大鱗畫

雪掃いて祇園の朝は静かなり 呂風  
 一力の暖簾成駒家が出そう 水客  
 天晴れな男祇園で飲んでゐる 木履



都踊りを見て夜行で發つと云ふ 一六  
 祇園町東の山は今宵雨 みさを  
 團體へ祇園無粋な灯がともり 九紫  
 遊ぶには非ず祇園へ廻り道 聞路  
 舞扇祇園はおつに遊ぶとこ 竹雅  
 宵の灯の祇園へゆるくカーブする 悟郎  
 甲乙に別れ祇園の灯がともり 世間音  
 鬼灯を買ふた祇園の石疊 柳一  
 祇園なら賣られて行つて良い氣でゐ 曉童  
 祇園とは舞妓を描けば良いところ 勝人  
 日本語の外人が行く祇園の夜 狸公三  
 御落胤と云ふが祇園で人と成り 毒仙  
 祇園からあなた任せの遊びに出 佐保蘭  
 大臣の顔を祇園に見付けたり 新水  
 一現の客は祇園へ追ひやられ 秋無草

地下足袋は祇園の町へうつろな眼 有耕  
 無遠慮に祇園の宵へパツカード いの助

「祇園」の概略

四條大橋を東に渡つた一帯の地では嬌聲麗姿の巷として知られてゐる京を象徴した舞子のだらりの帯はこゝのものである。大石良雄が敵討をカモフラージュするために遊蕩したと云ひ傳へられてゐる一力樓や、都踊の歌舞練場の所在地として京洛遊覧者の思ひをよす所である。

名所名本日

|                                                                                               |                                                                                                 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>(五) 京都の巻 選者 山川紫明氏<br/>                 嵐山 〆切四月二十日<br/>                 (四) 本願寺 〆切四月三十日</p> | <p>(九) 四國の巻 選者 前田五健氏<br/>                 阿波踊 〆切四月二十日<br/>                 宛先本社事務所・用紙ハガキに限る</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|

名物川柳を募る

粒々集

大連 大島 濤明

腹這へば地球を抱いてゐるかたち  
白雪へ辱ちる心の朝を起き  
女の子笑へば男の子は怒り  
斬る役と斬られる役の舞臺面

東京 富士野鞍馬

宮城の景色にならぬ機關銃  
軍隊の動きを謎にして見てる  
肅選に電車も旗をひるがへし  
トラツクの兵士へ空の風寒い  
騒擾へ新議事堂聳え

御影 長崎 柳秀

出勤をやんはり起す若い妻  
歩道まで品を擴げて店じまい  
驛辨でいゝのと女小さい聲  
催促のない借金は返へされず  
二日酔妻の無口が氣にさわり  
別莊番何んにも野心候はず  
女客支出の多いことを云ひ

大阪 長谷川 一徹

耻ぢもせで公職に居る偉さなる  
晝席を出てお天道にすまない氣  
首相どこで寝たなどと云ふ風呂仲間



# さすが大阪

柴谷宰二郎

繪と文

大阪に生れて、年中大阪に浸つて居る私には「さすが大阪」となる

と、何だが自分自身「あたしシツクでせうとも、あたし明朗でせうともどんな厚顔しい女でも人前で言へないのと同じ様になんだか、一寸面映い、そして親の味と一緒に離れて、見ないと眞實の味は解らないものである。

一寸大阪を離れて見ても氣付く事であるが、夜汽船で大阪へ歸つて來た時を想ひ出して見る。

荷物を兩手に暗い棧橋を足元ばかり氣にしながらトボ／＼陸地へ歩を運むで居る、これが我大大阪へ歸つ

た第一歩であらうとはどう晶負目に見ても思はれませうかつてんだ。



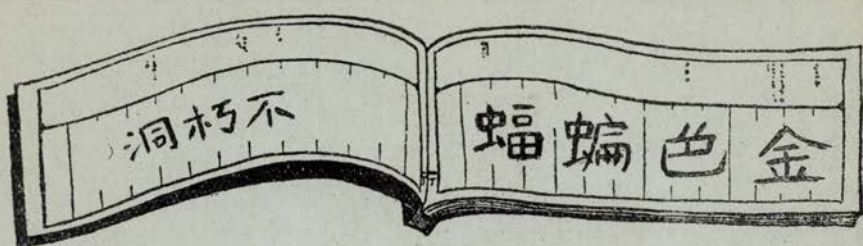
何だか遠い未知の土地へおつぽり出された様に思へて、わびしくなる

のである。

そこへ暗の中から出て來た田舎くさい市電うす汚れた電車に客が二三人乗つて、きしりながら天保山の方へ弧を描きながら暗に吸はれて消へて行く、まるで匪賊でも出そうで、「日本人こゝに有リッ」とさげびたくなる。

東洋の大都市、人口何百萬を誇る大大阪の海の玄關が滿洲（行つた事はないが）の原野の様な感じのするものもさすが大阪は廣い、「こんなところか有るねん」といふ事になるのかもしれないのである。

|| 船て歸れば ||



IV

メとハナの間で

も家族と離れてゐては何かと不便なことが多い。電話の取次ぎだけでも厄介である。南をうけた明るい部屋に多少未練はあつたが遂々三月の中旬に猿山アパートを引揚げた。

氣分を新にするために二階の襖をスツカリ張り替へさせ、北窓の近くへ小さな机を据えた。雑誌の仕事が片づいたら書齋の整理をしたいと思つてゐる。以前は大机にドツカと坐

らなければ何も書けない自分であつたが、近ごろでは机なんかどうでもいい、氣になつてゐる。

店に出入りの植木屋から、鉢植の小さな蘇鐵を買つた。鉢の表面に小さな株が三つ親子のように押合つてゐて、それ／＼青い葉を出してゐる。ソレを机上に置いてジツと眺めてゐると極小のものが持つ特異な愛着を感じさせられる。只ひとりゐる時、私のよい話對手である。

春霞立つ中空へ、う・わ・あ・んと黃鐘調の旋律を撒き廣げて十八日から四天王寺はお彼岸の幕をあけた。中日に一寸のぞいて見たが境内はいま仁王門の工事中で、あちらこちらに巨材が積まれ空地が少なくなつてゐるため名物の見世物も大きなものは少いが、それでも船木嘉吉老人の蛸々踊、娘サーカス、大蛇、七不思議、のぞきなど童心には／＼笑みかける興行物や、竹獨樂、野榮きざみ、八つ目鱈、もぐさなどの露天店約三百が線香の煙りにかすんでならんでゐる。

私は人に押されながらも數年前、故人にな

つた其象の

竹獨樂の音も春らし天王寺

の句を思ひ浮べてゐた。肺を病んで刀根山の療病院にゐた其象が退院後、句會に来て、私が演壇に立つと、すぐ眼の下にゐて熱心に私の柳話に耳を傾けてゐたあの丸刈頭を思はされた。

三月號で正岡義陽を容君の父だと書いたら「小生の父とあるのは嘘です」と容君から抗議があつたから取消すことにした。アレは幽蘭女史の直話をウツカリそのまゝ書いてしまつたので輕卒の罪、お容しありたい。「去年は子規の息とある所ですかゝれて恐縮しました」とある。單に同姓だといふので勝手に他人の息にしたがるのをかきな癖だと思ふ。子規ほどの息子にされることは滿更腹も立つまいが肺病の系統視されてお嬢さんの來手がないとソレも困りものだ。

三月下旬大阪帝國大學の記念會館で川柳動物慰靈會を開いた尤も兼題は「動物一切」であつた。その時の句の二三を紹介して見やう追ふなればわれ走らんと駝鳥ゐる(利生)



握りずし蝦の長さに出来て居り(柳秀)

奈良にて

遙引を見付けたやうに鹿が来る(たけを)

風の如くに飄然と來阪して「婦女世界」の編輯長をしてゐた塚越正光君が谷孫六主宰の「財教」の創刊編輯長として突如歸東した。女より金がいゝと云ふ譯ではない。先輩の招電



右は熱河の岩崎露君・左は津田和郎熱河君  
天津中央塔上にて二月廿五日撮影

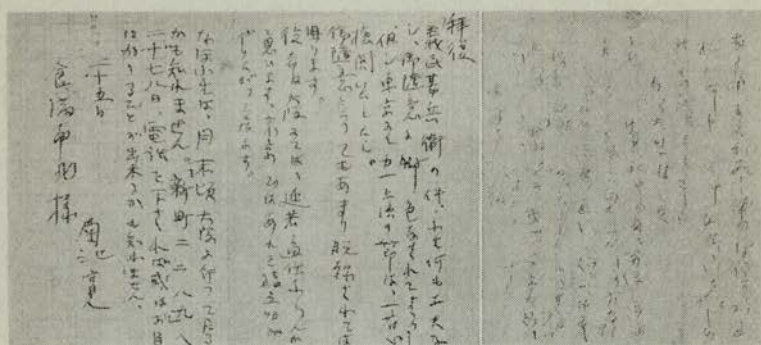
に酬いたのに外ならない。

森半疊君が赤倉ホテルから、橋本緑雨君が長野の藤長屋ホテルから福田山雨樓君は松島から、西田鍾樂君は吉野路から石崎柳石君は

廣島から等々々、春はホテルからと云つた風に頻りに旅の頼りがつく。せめて學校の休みにもこども等を引き連れてそこらの若草を踏みたいと思つてゐたが其の機會さへ與へられない私にとつては羨ましい限りである。

鈴木小寒郎君が佛蘭西俳諧に就て寄稿された。フランス俳諧は十數年前彼地のインテリ階級でかなり旺んに流行つたもので新聞社の編輯長なども創作してゐた。當時自分も興味をもつてゐた。名はハイクイであつたが内容は寧ろ川柳的のものが多かつた。(路郎)

東洋一の  
大阪 道頓堀 大キヤバレー マルタマ 支店 大阪・曾根崎  
神戸・湊 川  
電話南 322,1416,5312,5472番



## 手紙

ある機会に、うちへ来た手紙を一々調べて見た。可なり有名な人のが数あつた故人の部では渡邊霞亭翁が如何にも氣樂さうな消息も面白い。坪内逍遙先生からはコマ／＼と芝居の事に就て、繪人で原稿紙五六枚にかきなぐつてあるのも本當に御親切だと思つた。

尾上梅幸丈のはいつても芝居の事が書かれ中村鴈次郎丈のは芝居の大人をしらしめてくる手紙が多い。さうして榎茂都扇性翁も亦コマ／＼の舞臺の注意をして來られたのは頗る敬意がはられる。それから今人の方からは菊池寛先生の頗るカンタンな書狀、久米正雄氏の頗る丁寧な消息、幸田露伴翁の要點だけの手紙、浪六氏の叱つてゐるやうなの、田中智學居士の非常に懇篤な數々の御手紙、それに、岡本綺堂氏の禮をつくされたる、碧梧桐

## 食満南北

氏の要領の得てゐる消息、吉井勇氏のはがきに要領を書かれるだけ、など皆とり／＼に面白いと思つた。其外かつて名媛と呼ばれた女の方からの残してある、これは成丈長いのを選つて置いたのが今よみかへすと實に其時が眼前によみがへつて來るやうだ。

近くかうしたものを一巻にあつめやうと思つてゐる。川柳家などおひまがあつたら拙宅へ來られた上、このくさ／＼の消息文をよまれるのも亦一つの川柳道の爲の知識かと思はれる。實川延若丈のは殊に柳味があふれてゐる。これは數あるたゞ毛筆でなく萬年筆や、インキで描かれてゐるのは何とやら惜しい氣がしてならない。私は勉めて毛筆を用ひてゐるが用事はこの限りでない。

(上掲の手紙、右は坪内逍遙、左は菊池氏)





たまむし塔

# 名家の話 (二)

## 鳥山一步

テニス観る眼を遙かせば淡路島 一步  
その「コート開き」は盛會であつた。熊  
谷一彌、大藪彌次郎、僕等が主賓として招  
かれた。

須磨の藤田男爵邸のテニスコートは邸か  
ら距離のある山腹に築設され青葉のころ我  
々が始球式に招待されたわけであつた。女  
流庭球人の顔も列んだ。

この日は思ふさまに打ち捲つた。

藤田さんの令息、令嬢もラケットを振り  
廻はした。こんな愉快なことは初めてのや  
うに見うけられた。スポーツ人のこゝろも  
ちが平素接見される他の儀禮一點張りの者

とは餘程異つてゐたことに満足されたから  
だらうとおもつた。

コートは綠色支柱のネットに取り圍まれ  
て松、雑木、青草の背景に調和し、モダン  
なクラブハウスは際立つても見えた。

こゝは、海拔何百尺かの高地である。コ  
ートの後方は高く坂になつてゐて松林の影  
を落した前方はだら／＼坂になつて一面の  
畑である畑の向ふには人家が點々してゐて  
視野をひろむると淡路島を浮ばせてゐる瀬  
戸内海、白帆の船脚は句にもなりそうだが  
遙にうすかすむあたりは紀州とおぼえ、風  
光明媚いはん方なしのところである。

コートの左側は小高く崖になつてゐてそ  
こを上ると青草の敷地である。一人々々テ  
ニスに疲れたところこゝに上つて来て汗みど  
ろのユニホームを夏草に投げすてるやうに  
する。いつの間にか何人かゞ横臥しながら  
「いゝ景色だナァ」と感嘆し合つたりした。  
しかし、球の音は續いてゐるので頸を斜  
めにかしげるとテニスの活舞臺も眼に映つ  
た。

その晩、藤田邸では招待宴が開かれた。  
レコードにつれやがて畫の勇士達はダンス  
を始め出した。無粋な僕はダンスを踊れな  
いので、一人ウイスキーを賞味しながら、  
この次の日曜日にもコートに来て令息や令  
嬢にテニスを教へもし、また青草から淡路  
島邊りを俯瞰する楽しさにも浸りたいなど  
考へてゐた。

ダンスよりウイスキー、ウイスキーより  
もテニスの僕であつたからだ。

## 玉突は

ピリヤード川柳へ

上 沢 町

# 街頭イんチン風景

藁の油とハブの種明し

西田 紳 樂

陽氣が暖くなると、街の盛場といはず、郊外といはず、泥に酔った鮎の様にぞろ／＼と人出が増してくる。お彼岸とお大師詣りの善男善女が街頭に溢れる。そこを見逃さぬ街頭イんチキに一寸目をくれて見るも興味がある

藁の上に通路麥の白衣の男が、小さな組板に黄色い草の根をのせて、ナイフで細かく刻んで、その小片を一つつまみ、コップの水に投げ込むと、水が黄色く色づく。

「さあ、胃腸の悪い人、便通のよくない人、肩が凝つたり、眼がかすむ人は遠慮なく服んで行かつしやれ、これはワシが國越中の山奥で採れる弘法大師お告げの薬草ぢや、一袋が三十錢ぢやが、今日はお大師様の日ぢやで二割方よけいに込んである」

と口上巧みに賣りつける薬草が、まがう方なき黄蓮の根である。これが二三匁程紙袋に

入れて二十錢に賣ればまず九層倍にはならうといふものだ。

お大師さまのありがたきで、高い薬を高いとも思はず買つて行く人は先づ幸福だが、助からないのは、先般新聞の社會面を賑した様な、支那人から買つた人參が中毒して、死んだり重症にかゝつた人が出来たりしては、單なるイんチキとして見送せず、府廳の化學室で調べて見たら、烏頭が混入してゐたといふそれである新聞がデキタリが交つてゐたと麗々しくデキタリの説明を加へてゐる。デキタリスも用ひ用では強心作様ある薬草だけに素人には危険に違ひないが、人參の刻みに混入するのは可笑しい、なぜならばデキタリスは青い葉であるから、盲者でない限り白い人參の刻みと見わけがつかぬ筈は更にならないが、大新聞がこれに似た間違を書き立てる事は甚だ

珍しくない。人參に烏頭が混入してゐたのなら素人目に見分けが付き兼ねるから危険な事である。烏頭は「秋の高山に登れば紫色の美しい花のさく」とりかぶと」の根だからアコニチンを含む毒草で、心臓薬として貴重な一つで、あるが斯道の學者が此の成分研究中に誤つて一命を落した程のいはく附のもので、街頭イんチキも彼様な事があるとすると、氣をつけねばならない。

今は過去の語り草位に扱はれる蝦蟇の油賣が、當今は少々方法を代へて街頭に進出した路傍の廣場にステッキで圓線を描いて、この筋まで閑人を引寄せての口上は、  
「ヤア／＼お立合、御用とお急ぎのないお方は暫く聞いて行かつしやい。此所に取出したるは藁の油、がまと云つてもたゞの藁と藁がちがふ。世に之を稱し四六の藁、四六、五六はどこで明る。前足が四本、後足が六本あるのが四六の藁、この藁は江州は伊吹山で採れる。藁の油を採るは、先づ藁を四面四角の鍵の箱に入れる。藁は己が姿の醜さにたたり、たらりと油の汗を流す。それを集めて柳の小枝でとろり／＼と三七、二十一日の間焚きつめたのがこの油！」



といつたのは昔の墓の油賣だが、近頃の墓の油賣は方法が違ふ。小さな鍋に乾物にした墓の二三匹を入れて、これに黄色ワセリンを加へて客の前で煮て見せる、火の熱でワセリンが熔融する、暫く鍋を火から離すと固まるのを二十瓦程の不酸化罐に詰めて十錢位に賣つける。ひび、あかぎれはもとより、金創、から難姦痔と昔の様な事は言はぬが、切傷一切、やけどの妙薬、此の一罐家に備へ置けば外科醫を雇つて置くより確かな様な説明をする。その説明が化學應用のインチキと來てゐるから、そこいらのお立合衆、舌を巻いて感心するから面白い。その風景を見てあれば、右のワセリンである墓の油を掌に塗りつけて置いて少しのアムモニア水を落し込む。それから、これは御承知の通劇藥鹽酸だ、金さへ此の通り溶ける劇藥だといつて、亞鈴屑にぶつかけてブツ／＼泡を立たせて試験をしたものを、右の掌に注ぎかけると、そこにはアムモニア水があるから、忽ちクロール、アムモニアの白煙を發してもう／＼と立登る。處が掌にはワセリンが塗布してあるから、鹽酸もアムモニアも手を冒す心配がない。そこで、諸君、此の通り劇藥が煙を發してゐるが、墓

の油を手塗つて置けば少しのやけどもしない。墓の油の効能はまづ此の通りだと吹聴するから、そろ／＼懷中から、墓口を取出すお立合が出て來るといふ、誠にお芽出たものである。

墓の油は、ほんとうは蟾酥といつて、墓から採るものに違ひはないが、墓が鏡に寫つた己が姿の醜さにたたり／＼と流す油汗でもなければ、乾物をワセリンで煮て抽出できる成分でもない。詳しくは専門的に涉つて面白くないから避けるが兎も角も、六神丸の成分であり、最近此の研究で藥學博士の學位を取つた人がある五十億倍の溶液で心臓に作用するといふ成分を含んだしたゝ者である。強心作用は近代化學の發見だが、その麻酔性は既に支那の古代から知られてゐる。江戸時代の飄輕者が、それで惡戯をした事は秘中の秘だが、序にちよつびり紹介すると、男性のしかるべき處に塗つて置くと、麻酔性のために磨擦しても感覺を失ふから、女性が長時間樂しめるといふので、吉原あたりで應用した遊客のあつた事が秘話として傳はつてゐる。

ともあれ、左様な墓の油だといつてワセリンを二十瓦程十錢で賣れば、それは藥九層倍のその倍にもなるぼろい仕事である。

今一つお芽出たいお立合に見せてゐる街頭

インチキがある。これは先般市電今里終點の廣場でやつてゐたのを現に見て來たのである大學の角帽を冠つた男が、群衆の圓陣に取圍まれて、小机の上に琉球のハブだといふ蛇の一種を瓶詰にしたものを一個備えて、種々強壯劑たる所以を説明した後、如何に此の成分の強烈なものであるかを諸君の目の前で試験をして見せる。といつて取出したのはが、例の鹽酸瓶である。大學帽氏は壯重なる口調で「これは諸君御承知の通り劇藥鹽酸であることにあるハブの燒酎漬からは目には見えぬが絶えず強烈なる成分を發散してゐるその證據は僕の母校何々大學の教授何々博士の實驗法によつて明かであるから、今その試験をして見せる。だが言つて置くが此の試験を見せたからといつて、見料を諸君から取らうの、後で本でも賣りつけやうといふ様なものと違ふから、落ちついて見て行かぬがよい」といふから、右の鹽酸のついてゐる瓶の栓をハブの入つてゐる瓶の口へ持つて行くと、瓶の栓は忽ち白煙がや／＼と立登る。「それ肉眼で見えない成分が此の試験によつて明かに知れるであらう」と得意がるのである。結局お立合衆そこはかの金を出して蛇の燒酎漬二十瓦ほど四五十買錢でつて歸る事になる。

あ、その白煙の種ですか、それはハブの瓶詰にアムモニアが入つてゐるから、その瓦斯と鹽酸が化合してクロール、アムモニアの白煙になる譯ですよ。

# 春にさしはしい話

平井 春 光

結婚以來、毎月つゞく赤字の家計簿を黒に轉換すため、思ひ切つて友人の二階借りをすることに決めた

僕は、僅か二丁ばかりの間をトラツクを雇ふも何とやら、いつそ大八車を引つづてやれと、毎日の通勤途上にある炭屋の軒燈に「かし車」とあつたのを思ひ出し、「轉宅をするんですが車を貸して貰へますか」とうす暗い店先に佇んだ。

「へえ、お貸ししまつせ、表に置いてありますかい、一番前のもつて行くつとくれやす」

「借賃は」

「二十五錢ですけど、いまお持合せなかつたら濟んでからでもよろしおます」  
苟にも車一臺貸すのに住所一つ聞くではなし、保證金を置いて行けとも言はずはじめて顔を合はすこの僕に、喜々としながら、梶棒と肩綱とを渡す老爺の顔を僕は不思議さうに見守つてゐた。こんな

條件で車を貸して、假りに僕がこの儘持ち逃げでもしたらどうする心算だらう。

「僕とこの所書き要りまへんか」

「へえ別に、なんならお名前だけ聞いとしまよか。」

「……………」

善人とはこんな人のことをいふのであらうと思はず涙がこぼれかけた。

善人のニコ／＼として遠い 耳

禿山

同じ日の夜おそく、やつと片附いた新居の机で、移轉通知のハガキを書き終つたところへ妻が下から上つて来て、さて呆れた顔で、

「いま、戸締りをしやうと思つたら、

表戸のどこにも鍵らしいものがないので下の奥さんに聞いてみると、なんとこのお家は戸締りをせないんですつて、どうせ泥ちやんが這入つたところで持つて出るやうなものなれにうちには店にも奥にも男が寝て居りますから大丈夫ですわと仰有るのよ。」

「へえ——。」

けさのことゝいひ、この話といひ、これが大阪の出来事かと、僕は膝を抓りたくなつてきた。

大都會の薄情さの中に育つてきた僕はこれまで十圓の金を貸すにも、二人の保證人を要求する人や、受取を先に書かしてからでないといふ金を拂はぬ人々を見て來た。

古びた双眼鏡を貸すのに五圓の保證金を取る某劇場があるかと思へば、僅か一錢足らない爲に終點まで乗せられる市電のお客、扱ては一年以内に轉宅すると敷金を沒收するといふ家主の横行する大阪に、これはまた何といふのびやかな話であらう。

夏は簾を掛けておくだけで戸は立てぬといった風景は草深い田舎の專賣特許とばかり考へてゐた僕は、つい身近に、しかも同じ日に二つものこんな事實にぶつかつたので、感情が戸惑ひしてしまつて暫くはボカソと口をあけたまゝ、妻の顔を凝視してゐた。

人生のスタートといふ二階借





# 近作柳樽

路

郎

選

ネオンの灯迷子の親の眼から消え  
押賣に家政婦が出て負けてゐる  
大阪の訛がついて落ちぶれる  
いつとなく質屋のぐるり建て詰り  
オートバイ當り散らした音で出る  
小説家貧乏に馴れ晝の酒  
ニヒリスト萬年床へ友が来る  
性格は弱くロシアのものが好き  
さて買ふとなれば月賦の煩わし  
偶然が嬉しくもない人に會ひ  
調査費と云ふが目當ての金貸屋  
兩親が達者役所のヒロイズム

松江

大阪

神戸

大阪

大 門  
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
九 葉  
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
彩 泡  
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
山 川 兒



一息に乾して返して固き膝  
 女事務みんな一緒に引き上げる  
 裏表くわしく聞いて逆らへず  
 意見には非ず母親頼むなり  
 利己主義の清算に服むカルモチン  
 夢のとほりに社をばしくじる  
 踏切で兵隊さんが待たされる  
 吊皮にゐて戀人を守りゐる  
 お高くは居れど麗人二十八  
 教養が有るはつかりに嫁き遅れ  
 恩給で生きる望みか若すぎる  
 先輩へマスクが邪魔な両手の荷  
 長靴のしやんと立つてゐるつまし  
 のび切つたゴムによく似た倦怠期  
 野球しに来れば賣れてる埋立地  
 急診の産婆に貨車のまだ續き  
 借電話はつと氣付いて聲をかえ  
 ふぐ食べて叱られてます御曹子

|   |   |   |   |   |    |
|---|---|---|---|---|----|
| 同 | 大 | 松 | 大 | 今 | 大  |
| 同 | 阪 | 江 | 阪 | 治 | 阪  |
| 菊 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同  |
| 人 | 秋 | 榮 | 沐 | 曉 | さい |
|   | 無 | 之 | 天 | 童 | いち |
|   | 草 | 進 |   |   |    |





餅花をちぎつて憎いこの返事  
春浅し冷たい鍵を意識する  
赤心一票はておれはふところ手

好郎君の結婚

川柳と新妻春は二重奏  
淋しさを紛らす唄と母知らず

脱獄疑獄

同胞の貧しき怒り知らざるや

青春の書棚を飾る社会主義

子なき家犬幸福の中に居る

銀行の柱信頼させて呉れ

ビルの窓赤いドレスが一寸見え

質草に不自由をする弱い戀

妊娠へお女將は間拔けたと叱り

粉吹雪拂はふとせず勤め人

時間氣にして給料はあがらない

この頃は叱らぬ父の白髪かな

銀狐寒さへ用をこしらえる

松江

凡同愚

大坂

同

今治

同文庫

大坂

同シナ子

廣島

同都子

大坂

同せいち

今治

同心府



はたく粉で男の心をかき散らす  
 風のない風車にも似て二十三  
 吸取紙戀の記憶にふれさせぬ  
 インク壺ある夜は僕の悔に觸れ  
 拂うとけと今日も財布を當てにされ  
 齒科待合室金一匁の話  
 安らかに眠れと石で押さへつけ  
 帶揚げの色もヤトナとしての初心  
 惡友のためへ崩した五圓札  
 おちよやんも仲間へ入れるあみだくじ  
 市役所で君が戸主かと念おされ

耕朗兄と四年目の再會

椰子の葉蔭に戀はなかつたプロフィール  
 床屋にてまかせきつてる妓のポーズ  
 別れとの便り持つ手に雲走る  
 はたらけば働ける掌になつて來た  
 うがひ水若さを惜しむ夢あまた  
 猥談に密柑の皮が疲れてゐ

松江

大塚

錦戸

京都

大阪

今治

豊ヶ池

大塚

長野

一平

同 三

同 履

同 雅

同 七

同 樓

同 朗

同 善

同 太

有 爲 郎





移 轉

トラツクのひゞきに覺めた身はかなし  
 丹前になつて話題を子に貰ひ  
 一圓でほろ酔ふてゐる春の風  
 生きてたと云ふことだけの半生記  
 泣き落しの手と知つてゐて不憫なり  
 小兒科へ氣位ひ高き女來る  
 昇給は先づ末つ子の靴となり  
 結構な嘘があつたり處世術  
 なさけない言葉良心あるかは  
 雄圖むなく朝鮮靴を履き  
 俺の椅子ぐるりは鞭の音がする  
 急性とやらで大きな人が逝き  
 春の陽にとけ込むつもり女出る  
 酔狂をせよとは咲かず山櫻  
 ハイキングへ肥の香高し麦青し  
 火鉢の火妻を呼ぶ日の手があかし  
 釘一つ打つのへ妻も來て立ちぬ

大 阪

神 戸

名古屋

大 阪

朝 鮮

神 戸

島 根

大 阪

同 不 同 天 同 堯 同 方 同 恍 同 久 同 雲 同 水 同  
 凡 子 子 子 眠 二 雄 路 客



眞ぐ泣けてきれいなむすめこゝろなる  
 金借るに妻の美しさなど言はれ  
 あげ足を取られとむない凡夫かな  
 早仕舞ひ金の無いのが後になり  
 二三日早やく歸れば子に問はれ  
 蒸しタオル勝つて氣持のよい熱さ  
 世の中をひがみ都會から戻り  
 女將もう一步譲つた笑ひやう  
 開店日盗電の灯につかれ  
 玄關の暗さ黒住教の支部  
 もう隣りまで寄附帳の聲が來た  
 サイレンへ雲の去來も見て居れず  
 心境の變化古本などあさり  
 生きる道女だつたらなと思ひ  
 シートに美しき夢の動悸すはれ  
 きみ見ぬ日は心の飢と闊ふ日  
 山の猛者三面欄に散つてゆく  
 妻も早や子に叱られる歳になり

天橋立

木患子

大舞

翠峯

大勝

同利生

松江

同登美也

京都

同狸公三

大阪

同牧人

白菊散

同白雲

松江

同比呂史

兵庫

同斗風

同





躍動の春の大地に立つ歟だ  
靴みがき又戀愛の春で候  
血の花咲けりと三期の日記なり  
宗教復興床屋の話題にもなり  
運命を歴々と見る校友誌  
讀む人の心亂したさんげ録  
脱帽もせず洋装の初詣で  
官服の手前もあらう縄暖簾  
通譯を使ふ小言に腰が折れ  
強性を張る丈け智恵を持ちもせず  
マスクせぬ女中の方に健康美  
收賄は首を縊つて吐き出さず  
スケートを見てゐる方だけ寒くなり  
神詣でまだ儲けたい手を合せ  
雑談の圈外に居る生き字引  
落ぶれた同志先祖を誇り合ひ  
純情をフエミニストだと笑はれた  
戀人について行けないスキーなり

幾川

壺ヶ池

今治

神戸

朝鮮

大阪

神戸

長野

加古川

朴泉

一更

同 蛇の鷹

同 蘇堂

同 惡源太

同 鈍魚

同 鬼門

同 柳兒

同 天秋

同



御本家の長男といふ幅でくる  
島巡り酔はぬ薬を飲んで行き  
鳥が啼く木立の中の僕一人  
佛壇が目につ法事前の家  
中座忠臣蔵を観る  
此頃の色彩も混ぜてゐる新駒家

大雪

新聞の來ぬのを豆腐屋が言ひ歩き  
新築へ易者は金を考へず  
我が恥を語つて誇る酔ひ心地  
重役は土を踏まない靴で來る  
境遇がどうのこうのと買ふカメラ  
社長邸可愛と撫て嚙まれたい  
酔漢へ吊革ふたつもたしとき  
踊り子の喧嘩した手を組み合し  
夜遊びを癖と感じた夜も遊び  
摘む花の名は知らねどもうらゝかな  
看板の塗替もある春の街

市木

晴二

神戶

同陽出男

大阪

正一

釧路

章泉

大阪

菊路

松江

蘭蝶

東京

四塊

大澤

十九緒

同

自由郎

神戸

吉左右

名古屋

蕪人

伊豫

京司

同

富美女

大阪

いの助



|        |        |        |   |   |             |        |   |        |        |        |        |        |        |        |        |        |             |        |        |
|--------|--------|--------|---|---|-------------|--------|---|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------------|--------|--------|
| 大<br>阪 | 今<br>治 | 大<br>阪 | 同 | 同 | 重<br>久<br>池 | 大<br>阪 | 同 | 松<br>江 | 大<br>阪 | 大<br>阪 | 大<br>阪 | 神<br>戶 | 大<br>阪 | 松<br>江 | 大<br>阪 | 豐<br>中 | 大<br>阪      | 大<br>阪 | 尼<br>崎 |
| 葉      | 鶴      | 玉      | 夏 | 並 | 豆           | 十<br>九 | 柳 | 抱      | 澄      | 靜      | 三<br>林 | 遠<br>見 | 天<br>界 | 春<br>巢 | 雌      | 伊<br>沙 | 美<br>知<br>夫 |        |        |
| 光      | 聲      | 虫      | 光 | 木 | 樂           | 柳      | 狂 | 月      | 風      | 城      | 坊      | 路      |        |        | 雄      | 緒      |             |        |        |



終電車歪だ戀を乗せて來る  
 直接に會へば履歷の束を見せ  
 儲け口約束時間間違はず  
 流行歌覺る迄が魅力なり  
 子が上げる風の後の父の顔  
 こゝろ楽しく雪の音きく二人  
 初日の出砂に子の影親の影  
 頓服で押切つた風邪子にうつり  
 酔ひ遣れ是が男の端つくれ  
 乞食つて雪に座るが藝でなし  
 氣樂です行つてみなさいと紹介屋  
 不信任云わさぬ内に首を切り  
 自信なく堅い御人で押し通し  
 花柳科醫ペープメントに幅をとり  
 御愁傷様から風邪をひいてくる  
 ホームからなつかしく見るネオンの灯  
 父親を友達にする獨りつ子  
 順禮の笠迷惑な汽車に乗り

|    |    |    |    |     |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |    |
|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|----|
| 長野 | 竹原 | 東京 | 石川 | 名古屋 | 愛媛 | 伯耆 | 大野 | 兼川 | 鎌戸 | 大阪 | 西宮 | 島根 | 大阪 | 河内 | 大坂 | 湯 | 大野 |
| 千  | 春  | 史  | しと | 正   | 幸  | 秀  | 悲戀 | 楊  | 凡  | 綏  | 山  | さ  | 星  | 竹  | 小  | 柳 | 清  |
| 隈  | 帆  | 葉  | し  | 穂   | 嗣  | 峰  | 坊  | 柿  | 郎  | 配  | 紅  | だ  | 湖  | 阿  | 貝  | 昌 | 彦  |





中腰で住む國境の内地人  
母だけが負けぬ我が家の風邪藥  
空想に冷めたい雲が北へ散る  
投キツスして眞直ぐに歩いてる  
刑務所を聞いて車掌に見直され  
就職に希望を述べる頼母しさ  
女よし男なほよし俺の子だ  
十日戎今年の福も壊れさう  
上役の子へ寂しくもへつらつて  
節分の髪がきれいなタイピスト  
逢つてゐるときも氣になる腕時計  
たん壺のあまりに長く兄は病み  
そう云つて見れば家相も氣にかゝり  
無抵抗主義の女中と坊つちやんと  
書置の事死ぬるにも見榮がいり  
紙ぼこり競馬係場いま黄昏れて  
見舞品さて病人を慰めず  
アドバルン我が世とばかり浮て見せ

朝鮮 松江 大阪 神戸 尼崎 大阪 島根 瀬ヶ池 朝鮮 大阪 高 愛媛 尾崎 大阪 同 神戸 大阪

東狂子 磨夫 天國 海中 美津生 歡津路 一鴻 イヅミ 骨人 まさる 寒草 みきを 九紫 觀月 鐵心 靜路 朝雨 逸苦



君見舞ふ心に掛る長廊下  
 お東へお西へ孫を連れ歩るき  
 香具師だけが残つたらしい輪のくすれ  
 生活苦知らず精勤褒めてくれ  
 日本晴れいゝパッさんだねて云はれ  
 雛人形おつとりとして灯に座り  
 ルンペンへ氣の毒な程犬がほえ  
 着流しで出るは金策淋しい日  
 ショーウィンドウ狐下がつて冬が来る  
 狭量を眉に見せてる老眼鏡  
 燕でと一段格を上げて云ふ  
 遺梁へ女房なんでも口を出し  
 地平線春のリズムは流れてる  
 賽錢も派手な音なり自前の妓  
 盛装の女は二等客でなし  
 男と生れ男と交り負けてをり  
 糧を得る爲めだ皮肉も聞き流し  
 噂など笑ふ三男中學生

伯耆 大坂 同 尼崎 大阪 神戸 大阪 松江 井屋 松模 尼崎 名古屋 兼川 松江 高松 兼川 奈良 名古屋

小判 峰月 七歩 美知 紫香 麥一 五三 讓二 井の蛙 圭之介 正柳 五堂 新出樓 讓二 柳夢 笑朗 葉魚 兄





# 川柳指導講座

講師 塚越正光氏

課題 「手紙」 一人一句

締切 四月末日  
發表誌 七月號  
投句 本社事務所宛

|   |   |    |    |   |    |   |   |
|---|---|----|----|---|----|---|---|
| ら | い | 淋  | 世  | 一 | 高  | 一 | つ |
| し | ゝ | しい | 渡  | べ | 島  | 堂 | り |
| か | 花 | ね  | りの | つ | 田  | に | 錢 |
| ら | を | ね  | 上  | も | 葉  | 集 | の |
| ぬ | 咲 | て  | 手  | く | 子  | め | た |
| 女 | か | て  | 馬  | れ | を  | て | も |
| 女 | せ | て  | 鹿  | ず | 喰  | 今 | と |
| の | 花 | 櫻  | に  | 課 | べる | 日 | で |
| 道 | 屋 | の  | も  | 長 | に  | も | 寒 |
| を | の | ひ  | な  | は | 下  | 金 | い |
| 説 | 春 | と  | り  | 通 | を  | の | 音 |
| き | 來 | り  | 給  | り | む  | こ | を |
|   | る | へ  | す  | ぎ | き  | と | 立 |
|   |   |    |    |   |    |   | て |

|   |    |   |   |   |   |   |   |
|---|----|---|---|---|---|---|---|
| 大 | 愛  | 竹 | 大 | 島 | 盛 | 大 | 今 |
| 阪 | 媛  | 原 | 阪 | 根 | ヶ | 阪 | 治 |
| 靜 | ひろ | 芳 | 靜 | 凡 | 利 | い | 枯 |
| 女 | ろ  | 泉 | 波 | 愚 | 彦 | さ | 佛 |
|   | し  |   |   |   | む |   |   |



# 病人覺え書

住田 亂 耽

△病人は甚だ勝手なものである。自分の意識が確かな時は「大分弱りましたな」位の見舞の言葉が慫慂しく、つまり自分を病人らしく扱ってくれる態度を見舞客に望み、身心共に疲労してゐる時は、「顔色が非常によろしい」といふやうないくらでも、自分が健康者に近い状態にある安心を得る挨拶を言つてもらひたい。

△僕は病氣になつて、僕の平常の好物を皆禁じられた。路郎氏曰く

「餘りうまいものくひすぎた罰やぜ」  
蓋し、これは、まさに僕たるものゝ虚を衡いた言葉である。

△僕は二月、自分は病氣に倒れ、愛妻の死に會ひ、全く不幸の底邊に身を置かれた。

然し今は、幸福の三角形の頂點をはるかな

がらみつめて、これへロツククライミングをこゝろみる意氣と熱を、しづかに用意してゐる。

△醫者は勿論病人をよくすることが、商賣であるが、病人が醫者をリードしてゆく場合が屢々ある。

△病氣がよくなつた場合、注射、藥が効いたといふ感謝の他に、一面自分の闘病術が効を奏したんだといふ誇りを、病人といふものにもちたがる。

△病後の養生といふものも大切なものらしい。僕のやうななまくら根性のある人間は、これをまことに要領よく行ふ。

△僕は醫者から一週間絶対安静を言い渡されたその時まことにしあはせなことには醫者の言を俟つ迄もなく、僕といふものはどうにも

動けなかつた。身體を動かしたい意志、慾望を全然もたなかつた。

△之と反對に、絶対安静を言い渡された時に、身を動かしたい意志、慾望をさかんに表示する病人はまことに不幸である。僕自身、これには若い經驗をもつてゐるので、二十年程前、腹膜炎にやられた折、醫者が鞆と一緒に立ち上ると、たちまち動きたくて仕方がなかつた。そして少しでも動くと、僕の腹はたちまち、大きくなつた。すなはち病氣が悪化してゆくのであつた。

この事は、醫者の鐵のもののさしの目盛が直ぐ證明してくれた。僕は今でも、あの鐵のもののさしの無氣味な感觸を未だに腹部に感じてゐる。

△同病の經驗をもつ見舞客であることは、病人にとり付より氣が樂である。

第一、自分の苦痛を逐一詳細に説明しないですむから。

△併し、この程の見舞客から、餘り立ち入つて、自己の經驗を話されると、これは全く病人にとつて疼痛である。

銀のメスよりも鋭く、自分の神經を切り苛まるれから。



△こんなことを考へてゐると、僕は見舞客のもつべき完全なる條件を具へる爲に、いろいろ、僕自身病氣をして來たやうな、ありがたいやうなありがたくないうやうな心持になる。

△僕は醫者を信じる。そしてまた藥といふものも、無條件に信じる。

併し、どんな藥からも、味といふものを感じ得しやうと決して思はない。

△ねてゐると、硝子越しに、屋根をあたる太陽の光りを見ることが、大きな喜びの一つである。

そしてその、日一日春に接近して行く微妙な變化も、今年はゆつくり眺め味ふことが出來た。

今、屋根の間の僅かな空間を、長い旅路の白雲が悠々と通りすぎるのを見た。

△病人は時計と友達になる。

△さきながら病人も亦多忙だ。食事、水藥粉藥、検温、濕布、便通、ETCこれらの連續線の中で、病人はかなりの労働量を感じねばならない。

まことに、贅澤な労働ではあるけれど。

△家内のとむらひに、遠方から、多くの知人が、しかも粉雪さへ降り混る寒い日に、馳

けつけてくれたことには全く感謝の辭がないそのうちの殆んど全部の人は、臥床中なのでお目にかゝれずまた、お禮の言葉を述べ得なかつたのは遺憾であつたが、二、三の知己が僕の枕元へ來て、顔を見せてくれたのは全く有難かつた。

友達のほんとうの貌といふものは、殆んど正視し難いまでの嚴肅さを底にもつてゐるのである。

△この二重の不幸のうちで、僕の見た一番悲しい貌は、やはり家内の親、兄弟達のそれであつた。僕は一言も交さぬうちに、澎湃と眼底から溢れてくる涙をどうにも止めやうがなかつた。

△最近の心境句を一つ――

引き汐の渚に立つた獨り者

一一、三、三

## いつ讀んでも面白い川柳句集



四六版美本  
自畫賛入  
正價壹圓

鞍馬二十年のあゆみ、人生劃期、川柳謝恩の出版であります  
御一讀を願います

發行所 東京丸の内昭和ビル四一二  
富士野鞍馬  
尙御知人へ御吹聴御聲援を願ひます



# 一路集

募集句

辛

抱

橋本緑雨選

(係) 緑 雨

川柳家戸籍調 (續)

(1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日  
 (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務  
 先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以  
 外の趣味 (10) 配偶者子供の有無 (11) 嫌ひ  
 なもの (12) 川柳に手を染めた年月

(405)

鳥居柳笑

(1) 鳥居眞壽夫、(2) 柳笑、(3) 明治四十  
 年八月十七日、(4) 和歌山市 (5) 大阪市南  
 區東願町一六、(6) 競技玩具商、(7) 仲人  
 はするものぢやない肩のこり (角風、(8)  
 ありませんが好きな句は、ほゝゑんで見せ  
 やうとする水枕、(9) 冠句、演劇、(10) 有  
 現在はまだ子供が有りません、(11) 自稱大  
 家汚れた一票、(12) 大正十四年五月頃。

(406)

石井奇文

(1) 石井健城、(2) 石井奇文、(3) 大正七  
 年六月十六日、(4) 大阪府南區瓦屋町五番  
 町二一、(5) 朝鮮仁川府海岸町三ノ一、

辛抱のたりぬ男にされて居る 水客 辛抱をするつもり入らぬ智慧をつけ 菊路  
 辛抱を説ききかされる膝頭 秋無草 その妻へ辛抱せいと目で知らせ 澄風  
 辛抱の強さへ子供無事に伸び 承春 辛抱のやがてを思ふ初任給 兄 兄  
 辛抱した椅子とも知らず羨まれ 静波 蒼空を仰いで辛抱しておかう 天秋  
 辛抱へやつと小金蓄ただけ 骨人 不身持の夫へ仕へて十五年 陽出男  
 辛抱の溜めた金なり薬代 蛇の唇 子をおもひ妻をおもふて通ふ也 晴二  
 子のためと辛抱してる未亡人 小判 辛抱のしびれを切らす長話 静城  
 辛抱の立志傳にも加へられ いの助 自分さへ辛抱すれば済むところ 美奈子  
 丸刈が辛抱強く續くなり いさむ 辛抱をする氣今朝から早う起き 惡源太  
 鯨入りの子に辛抱をくどく云ひ 堯子 人生の辛抱といふ杖で行き 石燈籠  
 辛抱をした手のひを見せ合うて 喜由 辛抱を願ひますとつめこまれ 美知夫  
 辛抱して別家を前に病倒れ 善朗 辛抱を願ひますとつめこまれ 美知夫  
 辛抱する氣蒲團を引つ破り 緩勾配 辛抱の光りは今日の名譽なり 木守  
 辛抱は今日一日と日を重ね 雀聲 我慢しろ辛抱せよと後二年 峯月



|                 |     |                   |     |
|-----------------|-----|-------------------|-----|
| 夜が更けて泣いて辛抱してゐる妓 | さわだ | 辛抱をします便りは寝間で書き    | 同   |
| 性格の相違に辛抱出来ませぬ   | 春 集 | これからはと辛抱のたのしみができ  | 雅 幽 |
| 辛抱をする氣角帯締めなれる   | 徳 三 | 鹹首になるまではと君も慾がなし   | 同   |
| 同情もせずに辛抱せよと云ふ   | 都會人 | 辛抱をして辛抱に泣いてゐる     | 十九柳 |
| 辛抱もよく涙ぐむ母であり    | 青 柿 | 上役の顔へ辛抱する惱み       | 同   |
| 辛抱のよかつた今日の店開き   | 九 紫 | 辛抱の化身のやうな母と住み     | 春 光 |
| なさぬ仲子も辛抱してゐるなり  | 葉 光 | 積立の辛抱定期勧められ       | 同   |
| 辛抱の嫁へ姑若か過ぎる     | 正 柳 | 辛抱が廻轉椅子で茶をすゝり     | 東狂子 |
| 泣くだけは泣いて辛抱して居ます | 章 泉 | 辛抱が足りない丈けの服裝でゐる   | 同   |
| 老の身へたゞ何事も辛抱す    | 美津生 | 辛抱は金なり今日の地位なり     | 方 眠 |
| 辛抱は男と言はれ早寝する    | 小 樓 | 人のする事と辛抱が強い       | 同   |
| 辛抱の見本のやうに梅が咲き   | 文 庫 | 辛抱の一口に貯金帳があり      | 久米雄 |
| 辛抱はこゝがしどころ母は云ひ  | ねへ子 | 寝て起きて又行くことをくり返し   | 同   |
| 辛抱をさす母親も泣いてゐる   | 曉 童 | (佳)辛抱の手本になつただけの人  | 四 塊 |
| 辛抱をさす巻紙長う書き     | 同   | (同)辛抱が家内平和の鍵となり   | 小 貝 |
| 辛抱をして居た妓とて惜しまれる | 新 水 | (同)辛抱を奨める歳になり     | 正 穂 |
| 辛抱をしての涙は見せぬなり   | 同   | (同)この暮しながの辛抱効である  | 山 月 |
| 辛抱をして東京はいゝ所     | 史 葉 | (同)辛抱はこれまでしたと氣をかへ | 曉 童 |
| 辛抱をする氣蒲團かむつて寝   | 同   | (同)慰めの言葉に辛抱勵まされ   | 靜 波 |
| 辛抱の娘と勝手口で逢ひ     | 白 雲 | (同)辛抱をほめれば膝へもたれてき | 秋無草 |
| 辛抱は一人前になつてくる    | 同   | (同)暫くの辛抱ですと背押され   | 雌 雄 |
| 作業服着一昔無事に過ぎ     | 竹阿彌 | (同)さあそこが辛抱ですと炭をつぎ | 水 客 |
| 子澤山個性殺して勤めなり    | 同   | (同)停年へ三十年を顧みる     | 承 春 |
| 辛抱をさせたは強い母性愛    | 彩 泡 |                   |     |

(6)無し、(7)紅薄く薄く姑の氣にあわせ  
 (8)息き止めてレンズの開を待つばかり、  
 (9)映畫、音楽、スポーツ、文藝、彫刻、  
 (10)無し、(11)雑音、(12)昭和九年十月現在に及ぶ。

(46)

地 黄 天 國

(1)地黄建道、(2)天國、(3)明治四十四年十二月廿五日(4)大阪市天王寺、(5)大阪市天王寺區上之宮町十二村田松華堂(6)表具現住所に同じ、(7)其日ぐらしの軒に雀が鳴いてるよ路郎、(8)まだ川柳に日が浅いのもつと勉強致します。(9)繪畫を見る事、スポーツ、音楽、(10)なし、(11)頭の高い人(16)昭和九年五月川柳雜誌山雨樓氏のバイロット欄より村田新市街氏に教はる。

(46)

村 瀬 琴 泉

(1)村瀬征太郎、(2)琴泉、(3)明治四十一年三月十日、(4)富山縣、(5)大阪市東淀川區十三西之町一丁目一一八、(6)株式會社十三ドリール製作所、(7)これ小判た

## 物 干

物干に出るに娘は氣をくばり  
 物干で巡査の裸見付けたり  
 いゝ天氣物干へ出て吸ふバツト  
 氣紛れに物干に出て欠伸する  
 物干は風水害のそのまんま  
 物干へ粉のふいた子も涼みに來  
 飛び番地又物干を潜らされ  
 愛の巢の物干飯を焚く所  
 物干のベビー服へも春の風  
 物干に老若男女現はれる  
 鳶の輪の眞下女は物を干し  
 物干にビールの瓶が轉んでみ  
 物干に寫してやるよと子のカメ  
 物干の日向を猫は見逃さず  
 物干を擡げて次の子が産れ  
 赤ん坊の嘔物干から下りる  
 干物を入れる掌さに星光る  
 お隣の物干も借る子澤山  
 物干は一家五人を色に見せ  
 物干の見る書齋へ通される  
 物干の子の剣戟をあぶながり  
 物干のひらめく中に娘の肌着  
 物干へ出て背の子の眼がいた  
 物干をおりと焦るものがあり  
 手がとぎさうに物干臺の星  
 物干に娘立つて晴れた空  
 お隣へ蒲團で物干蔭になり  
 菊美洋路

## 須崎豆秋選

物干のしばしソブラノとはなりぬ  
 物干で見る此の町の朝の色  
 どちら猫は物干へ來て寝るなり  
 物干に未だ其のまゝの螢籠  
 飛び飛びに白い雲あり物を干す  
 物干で男を使ふことに馴れ  
 天の川を見る物干の姉妹  
 物干を頼めば家主腕を組み  
 物干へ月が大きく上るなり  
 泣きやまぬ子を物干へ抱いて行き  
 物干の襪おそばの禮を言ひ  
 物干へ日本晴の洗濯屋  
 物干に去年のつるが巻き付いて  
 物干へ大根干してある寒さ  
 物干で聞けば硝子の破れた音  
 全集を讀む物干に風があり  
 物干の隅シャボテンの花がとれ  
 物干に蜜柑の皮が乾いてる  
 (佳)物干へ通してもらふ世辭のよさ  
 (同)朝の陽へ母は眩いものを干し  
 (同)妾宅ある日、物干シャツを干し  
 (同)物干で金槌の要る聲になり  
 (同)物干の上と下とで氣があはず  
 (同)お父さんに聞くと物干叱つて居  
 (人)物干で雲と話をしてみたり  
 (地)貸家あり妻物干が氣に入らず  
 (天)物干へ女は逃げて笑つて居  
 (軸)柳まで綱ひつばつて物を干し  
 豆陽出男  
 秋泡波 靜 同 雅 喜 德 葉 秋 同 水 同 新 山 同 春 同 久 幸 方 眠 捐 雄 光 月 水 客 草 光 由 幽 波 泡 男 秋

つた一晚ゐて呉れる(柳樽)尚路郎、破竹、  
 艸樂、雨迷、砂人、明珠氏等の作品が好き  
 です、(9)讀書、謠曲、卓球、(10)妻一男  
 一女、(11)ガソリンが嫌で便利へ遠く住み  
 (12)昭和九年九月、馴染は川柳雜誌を借り  
 てから、琴泉の活字で見えた十二月、川柳  
 が世間を見なほさしてくれ、現在川柳雜誌  
 社十三支部同人として精進中です。

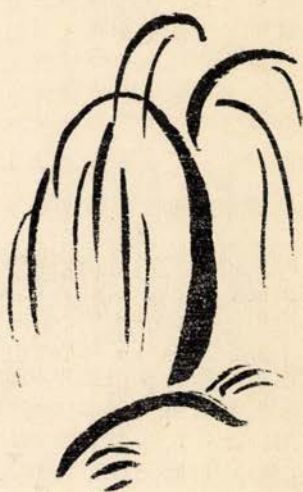
(460) 玉井彩泡

(1)玉井照美、(2)彩泡、(3)明治三十三  
 年六月八日、(4)愛媛縣松山市唐人町一丁  
 目、(5)大阪市天王寺區石ヶ辻町七四、  
 (6)洋服裁縫師大丸洋服裁縫部、(7)木津  
 川へ機首まげて行きまげて行き(白峰)、  
 (8)久々の鬚乳呑兒にながめられ、(9)魚  
 つり、卓球、歌留多、演藝、(10)妻あり子  
 供なし、(11)ソブラノ、(16)詩の國松山に  
 居たためか子供の時から川柳が好きで、十  
 五歳の時愛媛縣柳壇で楽しんだほど敷入  
 食べられず、當百選が最初の抜句です句會  
 等に出席しはじめたのは昭和三年九月から  
 です。



# 各地柳壇

のちのちを創る



路郎・汀柳・紳樂・整理

## 本社三月句會

『本誌有保證刊行記念』

三月十二日夜

於 誓 得 寺

定刻近より、降り出した、雨を衝いて集ふ柳友三十八名、戸外の雨を聞きつゝ句作に耽るには最も良き夜であつた。

披講にさきだち、病軀を犯して出席せられたる、熱の人、路郎師の「川柳と時事」と題する本社有保證に依る掲載内容の、擴大強化及び川柳の實際的社會進出等に關する抱負の一端の發表有りて、十時近く感銘深き其夜の幕を閉じた。

尙當夜の路郎盃は例により、兼題天位の榮を得られた、高橋不角氏の手に歸した。

出席者芳名(出席順)

(都會人記)

路郎先生、汀柳、史呂、柳笑、豆秋、勝、與三郎、都會人、默平、十九緒、朴堂、不、凡、斗見、北陵、歌都路、住雄、萬樂、梵、光、菊人、盤根、不角、十九柳、鯨雨、靜、城、里十九、朔風、方眠、遊步、鯛車、はじめ、青兒、いわを、夢裡、雨迷、桂三、變人、秋無草、柳狂、百雷。

席題 踊

互

選

踊る妓の何處か淋しい姿なり  
日本の踊り造花が咲き誇り  
稽古屋でこれも日本男子なり  
おもろない踊がすんだ無禮講  
踊るだけ踊つて會社誠になり  
のつけから踊るつもり長襦袢  
何事ぞせがれ踊を知つてゐる  
無細工な手附で踊るレコード屋  
はじめ

### 投稿清規

- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
- 二、文字正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月末日とす
- 五、投稿先は本社事務所

席題 入 學

綠 雨 選

舞扇拍子の中にたゞまゐる  
黒幕のかげで踊つた五十年  
近々と寄ればレビューの荒い息  
踊つてゐる姿に見えぬ生活苦  
東京音頭になると皆立上り萬樂  
入學をして先生はこはきもの  
入學の徽章先輩から貰ひ  
入學の微章先輩から貰ひ  
入學のそれから君をつけて呼び  
入學へ末の子らしさわぎ様  
入學へ赤飯の色鯛の色の鯛車  
入學のうしろ姿に父と母  
入學へはるばる乳母がたづねて來  
入學のまだ制服が間に合はず  
入學の嬉しさ靴かけて見せ  
方眠 朴堂 住雄 史呂 鯨雨 鯛車 青兒 不角 里十九 豆秋 光

先輩がある入學の氣が強し 萬樂  
入學のその日先生笑はせる 不  
入學の日が待ちきれぬランドセル 同

席題 年 頃 豆 秋 選

年頃へ母は案じる事ばかり 柿笑  
年頃になつて着物を長く着る 方眠  
年頃をお茶も習つてゐる手付き 不  
年頃の娘きれいに風を切り 角  
世話ずきのその年頃をみのがさず 遊歩  
年頃に話をされてうれしがり 秋無草  
年頃となつて内氣を案ぜられ 桂三  
亡き母に愈々似合ふ年の頃 歌都路  
年頃を夕刊賣の唇の紅 はじめ  
年頃は笑ふばかりでよいのなり 史呂

席題 混 引 夢 裡 選

混線の電話 駢引やつてゐる 菊人  
駢引が云へぬ夫に齒痒がり 同  
駢引は旦那の方が上手なり 史呂  
駢引を女給の口に聞くも春 不  
駢引のそらしてつけた巻煙草 鯛車  
駢引は主人代理の腹でよし 住雄  
駢引のある日卑怯な眼を使ひ 盤根  
駢引に馴れて笑ふてゐる一人 方眠  
駢引がうまく南地で酔はして居 方眠  
駢引を知りつゝ貴うた内拂ひ 登光  
駢引の電話機に肘をつき 萬樂  
結着へまだ縁遠い桁を見せ 秋無草  
割引いてきいても太い股火鉢 黙平  
(佳)駢引の税務係へ泣いて行き 鯛車  
(同)駢引の丁稚の顔に眞剣味 方眠  
(同)駢引が上手大阪人となり 不  
(同)駢引を知つて妓の酔ふてゐる 凡

席題 目 標 雨 迷 選

(同)子は子乍らに駢引を知つてゐる 史呂  
(同)充血の眼へ駢引のない欠伸 朴堂  
(同)駢引へ妻の出過ぎた口輕ろし 青兒  
(同)駢引は映雪をついて出掛けたり 變人

目標のある宿をとる團體旗 秋無草  
目標に本家と云ふが二つあり 黙平  
目標は十人並と云ふきりやう 不  
目標のある盛場の灯の動き 登光  
目標になる赤糸の頭文字 十九緒  
目標もなくベンチに寒くねる 十九緒  
飲み食ひに目標でない同志なり 桂三  
生活の目標あつたわ二十代 與三郎  
目標の鳥居が見へた山登り 靜城  
自信ある腕は目標小さくさせ 歌都路  
若き日の目標消えて五十銭 盤根  
(佳)目標のそばで目標輕んじる 菊人  
(同)目標がちがひ眼鏡の汗をふき 變人  
(同)目標へ青春と云ふ影がさし 青兒  
(同)目標へどつちつかずの社長の眼 夢裡  
(同)恥をかくことも目標近くなり 柳狂  
(軸)目標はさて人生の行くところ 雨迷

寶塚年頃同志誘ひ合ひ 同  
(五客年頃)の航空兵を志し 黙平  
(同)年頃は噂の通り退社する いわを  
(同)年頃は獨りぼつちで居て見たし 青兒  
(同)年頃の神經衰弱などになり 方眠  
(同)年頃の女疊へ文字を書き 十九緒  
(人)吊皮にもう年頃の線が見え 變人  
(地)年頃のあまりに夢が大き過ぎ 朔風  
(天)年頃の自分の部屋が欲しくなり いわを  
(軸)年頃は映畫のやうな夢を見る 豆秋

席題 酒 の 粕 里 九 選

酒の粕器用に砂糖包む母 不  
酒の粕砂糖の高い話する 萬樂  
酒の粕食べさしにして子は丸め 豆秋  
居残りへ母粕汁をあたくめる 遊歩

兼題 明 る い 路 郎 選

花のごとくに明るく咲く命 十九柳  
合格の闕明るく勝ぎけり 住雄  
合格の嬉しさ春の所爲ならず 歌都路  
結納を飾つて明るい部屋になり 豆秋  
我が家程明るいものはない寢床 變人  
禿げてゐる上を散髪屋の照し 不



二月二十五日 於カナダ

文化村とうゝ町る作り上げ  
發展のこゝらは池を埋めたところ  
發展の見込たなほへ杭を打ち  
踏切の柵で止まつた發展地  
發展に泥田も坪の値でよばれ  
發展へ老樹惜氣もなく切られ  
發展の機運動くに家内の死  
亂

悟郎  
艸樂  
春光  
同柳  
汀柳  
都會人  
柳

雜誌社  
松江句會  
(烏根)

兼題 屋 根 笑 鬼 選

屋根低く生活難の焼を上げ大島

席題  
硝  
子

よごれて周旋量の底き笑

硝子箱で咲いた花の色褪せて  
光二郎

席題  
湯  
氣  
山川  
兒選

湯氣にうかされ半裸體の女 三吉郎  
味噌汁の湯氣ゆらくと一家無事 大鳥  
藥屋根に今朝も平和な湯氣が立ち 天痴人  
味噌汁の湯氣へ野良蒔のまゝ座り 同  
風呂場から二十五貫の湯氣が出る 祥月

席題  
當選  
天痴人選

當選の蔭に踊つた黒い影 光二郎

せに一塵殺氣を

川柳  
日音

雜誌社 伯耆會  
二月八日 於伯耆川柳會事務所

兼題  
長襦袴  
美笑選

伴新婚の家にゆれて居り 春夫

襖袴廊育ちでませるる　ひろむ

伴風邪のなほつた勤めの身同

へ長襦袢で泣きくずれ起人

十八に着せて吞知れ長襦袢良人

長襦袢着る身で兄に學資出し起人

長袴袴あきならぬにわぬ日をすこひふも  
長袴半寺代とのぶ是、女将巴人

長襦袢年と一諸色が退せひろむ

土神作金一糸は色本在十てふす

(軸)長構伴語る話しを聞くでなし 美 笑

兼題 團 體 美 笑 選

(人)團體の汽車もやつぱり同じ音 起 人

(地)團體が泊ると決めた下駄の數 同 人

(天)團體と言ふ名で見せる寶物 同 人

兼題 評 判 起 人 選

評判がたてばたつ程固い 仲 小 判

其の頃は評判も良く顔も 好く 小 判

評判の好い妓からだが 弱い 小 判

兼題 金 小 判 選

金貨をして人情捨てちまい 起 人

計算が合つたと金の音が する 同 鐘

親よりも金の有難さ知る 身 同 鐘

兼題 選 舉 美 笑 選

仕事着のまんま眞心入 入れて 小 判

選舉なんか他事の様に 飢えて 起 人

兼題 席題 歸雁、若草 互 選

若草を踏んで子供が乳を 呑む 小 判

日本へ思ひ残して歸へる 雁 小 判

若草の匂ひ俺には望み あり 同 判

若草はふまれたまゝに 春の色 美 笑

待詫びた春を若草色に 見せ 同 笑

風上げを子供若草ふん で 飛び 同 判

川柳 竹原句會 (廣島)

雜誌社 於芳泉居

二月九日夜 承春、一二三、芳泉三人吟

席題 雪解、床屋、繩飛、豫算、

邪魔、額出し 承 春 報

雪解へ葦の芽少し伸びて 來た 芳 泉

雪解へ思はず愚痴となる 足駄 承 春

雪解へ達磨の顔が落ちて 來た 一二三

挨拶を床屋鏡の顔へ云ひ 女床 芳 泉

こそばゆく指が這ふなり 女床 芳 泉

戀知つた事も床屋知つて 居る 承 春

繩飛の路次一ぱいのさわがし け 芳 泉

邪魔すなと止める女の 手 承 春

勉強の邪魔が嬉しい 許婚 承 春

顔出しをするだけですゝと 誘ひ 入 承 春

顔出をすれば不平も聞か される 承 春

青木史呂氏歡迎會 宵 明 報

二月十日、於貯蓄銀行支店 遠く本社より青木史呂氏來今せられ文字通

り肝膽相照らし懇談す。

兼題 姉 在間小樓選

支那米の味も知つてる 長女 宵 明

姉とゆき映畫に泣いた 姉を 柳 石

姉さんの秘密を知つて 淋しい 日 同

かばかりに涙を見せる 姉と なり 宵 明

嫁けと云ふ處へ姉は嫁く 覺悟 一 風

姉一人働いてゐる 長火鉢 曉 童

働いてゐる姉一人歸り 來ず 同 童

出戻りの姉の何處か 他人め 史 呂

川柳 今治句會 (愛媛)

兼題 麥 渡邊曉童選

麥畑に風あり春の風速機 宵 明

麥の値も知らずコロツケ 明日は 同

南無大師遍照金剛 麥青し 同

傀儡師麥の彼方へ消えて ゆき 小 樓

麥畑猫が走つてたそが れる 一 風

麥飯の匂ひ流れて陸軍 二等兵 世 間

麥畑つゞき郷愁ある ば 史 呂

麥を打つ隣も麥を打つて ゐる 一 風

サーカスの跡だけ麥の 背が 違ひ 宵 明

(軸)麥の葉の青さへ戀を もちつけ 曉 童

働きを賞められる 姉淋しう 居 文 庫

亡き母に似て來た姉の 叱りやう 世 間

お氣に召しましたかと 姉笑ふ 同

忍従の姉は素顔で 二十六 史 呂

アルバムへ姉は昔のまゝで みる 一 風

病弱の姉に戀など 知らす 史 呂

甘んで姉は女工の 服を 磨 史 呂

出戻りの姉へ弟の 口が 磨 史 呂

(佳)綻びをだまつて 姉は縫ふ 柳 石

(同)母亡きのちの 姉の 東 柳 石

(同)三味線がひけるが 姉の 不 柳 石

(同)鼻かんでやつてゐるの も 姉 柳 石

(軸)友人の姉なる人の 戀 柳 石

義捐金のなる木は 持つて 石 崎

未亡人三べん出した 義捐金 心 府

復興の裏を支ふる 義捐金 文 庫

義捐金のなる木は 持つて 石 崎

未亡人三べん出した 義捐金 心 府

復興の裏を支ふる 義捐金 文 庫

義捐金のなる木は 持つて 石 崎

未亡人三べん出した 義捐金 心 府

復興の裏を支ふる 義捐金 文 庫



義捐金の一部になつたサリリよ  
 義捐金炬燵の中で聞き流し  
 子を一人死なしてからの義捐金  
 義捐金娘故郷を思ふなり  
 (佳)金持の活字が目立つ義捐金  
 (同)義捐金勇氣を出したはした金  
 (同)義捐金豫算に入れて又不作  
 (同)義捐金幼な心を痛めたり  
 (同)義捐金神棚からも出して  
 (軸)一銭も心こころに生きている金  
 柳石

席題 香具師 青木史呂選

人間の弱さへ香具師はくそ笑み  
 香具師の品買つて歸つて叱られる  
 眞つ晝間香具師の情婦が逢ひに来る  
 ボカンと見てゐて香具師に呼び出され  
 立志傳テキヤの飯も喰つてゐる  
 縄張りへ大阪辯の仁義きり  
 (佳)香具師と香具師暗い所で耳打ちし  
 (同)子を運れた香具師三日の宿の雨  
 (同)冬空へつゝぬけてゆく香具師の聲  
 (人)姐御今日さくらに寒く狩出され  
 (地)敷島を一本出して香具師のひま  
 (天)アセチリン半分暗い香具師の顔  
 府明 石樓 童明 磨風 小樓 心府 小磨 青明 柳石

南國へ二人て鹿島立つ耕朗

(愛媛)

耕朗君を見送つての歸途梅津寺温泉の汐湯  
 に浸り湯上の氣分満點に今日の囁目吟をとの  
 事にて書き散らしたる句箋の内より  
 二月十日 大 樓 報

囁目吟

互選

鹿島立ち伊豫に吹雪の霽れた夕  
 山一つ越せば時雨れた跡もなし  
 見送りへ突然肩を叩かれたる  
 何も彼も朗かにして旅立たせ  
 ドラに萬歳感涙に船遠ざかり  
 萬歳の聲新婚を驚かせ  
 見送りにうづむき居るは身内なり  
 見送つて御機嫌ようと云ふだけ  
 海鳴りの音梅津寺酒をくむ  
 大靈子樓

川柳 螢ヶ池句會(大阪)  
 雜誌社

福田浮鬼君送別句會

二月十日

席題 光

流之介報

五十銭が光りにてらされてをちてゐる  
 (少年) 哲夫

鬼選

太陽の光まぶしく病みあがり  
 獨房へもおてんと様が光ります  
 二月の微光にお別れのほゝえみさなる  
 光り、ひかり、やさしき母の瞳にあるか  
 春近き光がコップの湯氣へ射す  
 (軸)一寸じの光に捨つる身の軽く  
 浮鬼

席題 送

互選

氣の弱い男涙で送られる  
 送らるゝ今日の貴方へ青い空  
 君送る病院の坂が短い  
 送られて歸る子供に雪となる  
 見送つて石ころけつて葉もちぎり  
 善朗

春近し友の行手に幸ぞあれ 遊子  
 見送りの一人に知らぬ女ある まさる  
 みのむしさらくとも鳴りきみ送る 縷紅  
 川柳雜誌社  
 道頓堀支部 映畫觀賞句會

二月十二日 於辨天座 青木史呂報

當支部は大阪第一の歡樂地帯を背景に有する關係上、敢然！映畫觀賞に依る句會を開催した。この新しい試みに參加される熱心な柳友は定刻を待たずして續々入場、暗中で手渡する句箋、スクリーンの反映で交す挨拶も靜かに、變つた雰圍氣を満喫、映畫終つて披露に移る。

兼題 映畫 史呂選

銀幕のスターに逢えば黒眼鏡 鮎美  
 チョコレート食べて一人である映畫 みつる  
 伴奏の忙しさ左膳あはれ出し 豆秋  
 クーパーに妻の吐息を見付けたり 都會人  
 映畫館看板にあるリアリズム 春光  
 青の光  
 月明の青きがなかにある祈り ト居  
 モロツコの熱砂の戀になる太鼓 朔風  
 戀は終りぬ  
 ウキーン今吹雪に暮れし戀人形 新七  
 永遠に愛せよ  
 最後まで愛する者の知る世界 朔風  
 (人)トリーキーヘスターシステム變つて來

(地)寒月を罵つて斬る 傳次郎 鮎美  
(天)ザエンド女溜息置いて立ち 都會人  
(軸)漫書觀る男苦勞のない男 史呂

兼題 辨天座 汀柳 選

辨天座一家そろつて行くと決め 史呂  
辨天座出て昂奮の吐息つき 都會人  
辨天座えらいよろしおましたナ ト居  
辨天座まで春雨にちよつと濡れ 豆秋  
心ぶらの話題にのぼる 辨天座 朔風  
辨天座クーバー張りがすましてみ みる  
辨天座ファンで仲の良い夫婦 朔風  
おもかげを槽に残す 辨天座 同歩  
二人とも腹が減つて 辨天座 遊歩  
辨天座ならばと母の許しが 出豆秋  
クーバーの聲まのあたり 辨天座 春光  
朗らかな従妹と入る 辨天座 春光  
嫂が二階に來てる 辨天座 與三郎  
待呆けになつて 辨天座 が暗らし 鮎美

川柳 神戶春の句會(神戸)

神戶支部も種々の事情から約二ヶ年の休會

から更生の第一歩を扇都柳界の表面に現はす  
日が來たのである、時陽春集ふもの又扇港柳  
界の新進氣鋭人々への活氣満ちた會合であ  
つた、遠く大阪よりかほる氏の出席を得て和  
やかさをも感じられた。

兼題 惡運 互 竹楓 報

惡運の火鉢つめたく膝にあり 刀郎

南無三寶女にほれた運のつき 竹楓  
惡運の同じ街道筋で合ひ かほる  
惡運強く女給に養はれ 柳坊

兼題 媚びる 柳坊 選

舞妓もう不自然でない媚びを持ち 三拍  
すぐ消えた媚びが淋しい 晝の酒 九葉  
いろ／＼の男を過ぎた媚びを見せ 一狂  
媚びる手にボタンうつかりちぎれる 吉左右  
媚びもなく正直者が腹を立て 明珠

兼題 童 陽 幸 選

童謡の會へ講堂大きすぎ 幸  
童謡へ親の手子の手春を行く 竹楓  
童謡の子供へ家中手を叩き 華水  
(佳)童謡へ夕陽が残る丘の上 同  
(同)夕刊が賣れ童謡を口ずさみ 一狂  
(同)童謡を叱り算盤持たすなり 刀郎  
(同)童謡がいつか背中で寝てしまひ 三拍  
(地)童謡もうつとり聞けば泣けてくる 柳坊  
(天)童謡を歌ふ子供が背の順 九葉  
(軸)童謡のラデオへおどる 末娘 陽幸

兼題 泣寝入り 九葉 選

泣寝入り外は静かな雨の晩 春秋  
共寝ぎ淋しく祖母へ泣き寝入る 陽幸  
泣寝入り風邪引きさうな暖をする 三拍  
泣寝入り足を延せばボキと云ひ かほる  
泣寝入りするとは見えぬ髪の艶 刀郎  
(軸)泣寝入りは佛壇へ足を向け 九葉

兼題 德利 かほる 選

徳利のこけたを幹事見てかへり 三拍  
惚れてゐる方へ徳利を下げて行き 明珠  
徳利は餘生を送る姿なり 幸  
しみ／＼と會つてうれし徳利なり 竹楓  
徳利の並んだ部屋で風をきき 九葉  
今出來た徳利を貰ふ隠し藝 刀郎  
徳利を並べて女に紙幣をやり 春秋  
徳利から春の微笑がこぼれてる 華水

兼題 包 裝 紙 明珠 選

包裝紙エレベーターに吐き出され 春秋  
大丸と一目に知れる包み紙包 逢治郎  
紙解くと故郷の土こぼれ 三拍  
包裝紙先刻の折り目考へる 刀郎  
(佳)包裝紙おんなじ世辭で渡される 同  
(同)勤め人今日のおかずを包ませる 九葉  
(同)おとくいへ主人とかはる包裝紙 吉左右  
(軸)包裝紙てんでこ舞ひのとき 明珠

兼題 市街スナツプ 刀郎 選

遅刻せぬ針見とゞける辻時計 三拍  
御無沙汰をしてゐる街の灯がはいり かほる  
タクシーが勝手にとまる立ち話 明珠  
馬が云ふことを聞かない人だから 春秋  
(佳)花を賣る灯たが残りビルディング 一狂  
(軸)號外を覗いた顔とうまが合ひ 刀郎

川柳 竹原句會 (廣島)

兼題 屏 風 承 春 報

子の寝顔枕屏風越に見る 碧園



慈善の瞳破れ屏風へ涙する 廣志  
見舞客屏風へ顔だけのぞけ 芳泉  
駄句一二枚張つて屏風らしくなり 一二三  
金屏風隣で借りる事にけり 芳泉  
南洲の屏風にしばし打たれけり 芳泉  
(佳)立派だと賞めて屏風が讀めぬなり 同  
(同)金屏風皆おごそかな座り様 芳泉  
(同)絶品と知らず屏風を賣り拂ひ 春帆  
(軸)高砂子のリズム嬉しき金屏風 承春

兼題 制 服 春 帆 選

制服をぬいで社會へいれられず 廣志  
虫干へ制服時代苦笑する 碧園  
制服をぬげば守衛とも見えぬ 承春  
卒業の日へ制服が名残り惜し 同  
制服の頃なつかしき應援歌 同  
制服の小女の胸も干めきて 同  
制服へ乳の丸味を見せて春 芳泉  
制服へもう婚約の話なり 同  
制服の頃なつかしい友に會ひ 同  
(佳)制服を脱いで母の苦勞知り 辰男  
(軸)制服が君僕と云ふ時代相 春帆

兼題 夜 遊 び 芳 泉 選

眠られぬ耳へ違つた人の足 廣志  
夜遊びを悟す燈明とは知らず 承春  
夜遊びへ母の情を忘れて 同  
夜遊びへ行末案じる母の影 廣志  
夜學とは名のみ夜遊びして 承春  
夜遊の女房の事もふと思ひ 春帆  
夜遊びにふと浮ぶ母の顔 辰男

夜遊びの歸へつた足を忍ばせる 承春  
夜遊の女房にすまぬとこへ来る 春帆  
ビツタリと夜遊止めて新世帯 一二三  
(佳)夜遊の過ぎた朝寝へ父の顔 同  
(同)夜遊を反省させる子の寝顔 承春  
(同)はのかなる興奮があり夜が出る 春帆  
(軸)夕飯が済むと何處かへいさ出る 芳泉  
(同)夜遊びの歸へり西瓜を盗んで来 同

席題 雲 一二三 選

山高し夕焼雲が千切れ飛ぶ 承春  
明日の日曜ラヂオ曇りと云ひ 碧園  
雲行へ船頭舵を島へ向け 同  
氣味悪く入道雲の寄せて来る 芳泉  
満開の櫻へ惜しい空模様 同  
行く雲へ故郷の事なぞ思つて見 春帆  
(佳)或る日の俺へ雲が飛び雲が飛び 同  
(同)此の雲の上を飛んでるらしい音 芳泉  
(同)見つむれば雲の動きも春なりき 承春  
(同)決斷へ雲悠然と飛んで行き 春帆  
(軸)二人には恨の大きい雲でした 一二三

席題 得 意 辰 男 選

湯で使ふ手拭得意先が知れ 承春  
隠藝彼の得意は皆な知り 同  
金甲の小さな得意見せに來る 春帆  
奉られて居ることも知らず得意そう 芳泉  
賞められて得意になつて尚歌ひ 一二三  
我が得意妻へ分たん膳が待ち 春帆  
(人)得意先つい手の用を頼まれる 芳泉  
(地)左程でもないがと得意そうな顔 芳泉

(天)商賣の弱味腹立我慢する 碧園  
(軸)得意なる唄を歌ひて人笑ひ 辰男

席題 言 譯 碧 園 選

言譯を考へ 社 長 室 一二三  
言ひ譯が立派に出来て首になり 芳泉  
言譯の言葉考へながら出る 同  
言譯も聞いて笑れまい目の動き 一二三  
(佳)言ひ譯は後で聞かうと目がけし 芳泉  
(同)言譯を伯父はきかぬと聞いてすみ 春帆  
(同)醉顔の言譯聞かぬ妻の聲 廣志  
(同)言譯を僕の心が否定する 春帆  
(軸)言譯を聞くに顔をなでてやり 碧園

各 種 旗  
七 寶 徽 章  
メ ダ ル  
カ ツ プ

川柳雜誌社指定

大阪上六

加藤旗徽章店



## 柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一舉手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

【大阪】▲塚越正光氏（本誌川柳指導講座講師）は大阪の婦女世界社の編輯長を辭し谷孫六氏の財教社の編輯長として招聘をうけ東京へ移轉された。▲文案家協會は三月二十六日夜新大阪ホテルに於て發起人の結成協議會を行はれ、川柳關係者としては本社主幹麻生路郎氏、本社賛助員長野晴濱氏、番傘主宰岸本水府氏、志方蝶二氏が列席された。▲阪大川柳會では三月二十六日午後四時から大阪帝國大學記念會館樓上に於て川柳動物慰靈會を催し、路部主幹が出席し、

白濱雨の中。▲平井春光君（本社同人）は大阪市港區西田中町三ノ二五へ轉居。▲西田艸樂君（本社同人）は三月二十七日お子達づれで大和萬葉の古蹟を行脚された。▲山本雨迷君（本社總務）と増位汀柳君（本社編輯長）は大阪體育協會の委嘱により日本學童卓球規則の編纂に當られる。

民氏編で發行された、定價一圓、東京牛込拂方町一四川柳俱樂部社▲「川柳放水路」は三月二十五日創刊號を發行、東京市荒川區町屋二ノ一九〇高橋方同會より。▲せりう社は三月九日雪の集りを催された。

【東京】▲福田山雨樓君（本社東京支社長）は三月二十二日より仙臺鐵道局管内の出張中、秋田、青森の川柳家を訪問された。▲大谷五花村氏（本社客員）は三月二十二日白河より上京された齊藤一力君と伊豆一周のドライブをされた。▲谷孫六氏（川柳の矢野錦浪）は個人雜誌「財教」を發行される、東京市京橋區寶町三丁目財教社。▲富士野鞍馬氏（東京）は三月中旬より又々福島、山形、青森を経て北海道へ旅された「テープの五色も吹雪にゆれてわかれを惜しむ銅羅の音」▲昭和十年川柳特選集が和田天▲岩崎蟬古君（昭和川柳社）は西宮市森具御茶屋所一〇一六へ轉居。



【福岡】▲三原狂路君(山口)は郷里へ歸省され川柳くるがね吟社の吟行を自宅で開催された。

【高知】▲朝田新水君(本社同人)は三月十三日舟々、規堂君と共に高知へ旅行、本社、瀧水、機見女、春水君其他帆傘川柳社の人々と會はれ、歸路琴平、栗林公園、岡山を巡遊された。▲佐竹白烟君追々句會は三月二十日高知川柳蜂の集會で催された。

【青森】▲青森縣教育會發行の「青森縣教育」の三月號よりは長谷川霜鳥君等の努力により柳垣が新設された。

【愛知】▲加藤文醉君(川柳へちま會)は名古屋市東區田代町四觀音道西一五ノ三へ轉居。▲伊志田孝三郎君名古屋は靜岡の樂瓢君と共に三月十五日東上、柳友三周年記念句會に列席された。

【廣島】▲本社竹原支部同人の春帆君は可笑、彌生君は一二三、馬占山君は速射砲、辰男君は一厘と夫々改號さる。

【滿洲】▲大島海明氏(本社客員)はハルビンへ行かれ三月五日歸運された。▲首藤竹楓君(本社同人)は今度滿洲機器公司へ入社されたので奉天府淀町七番地原田方へ轉居された。

【愛媛】▲本社今治支部の同人の「今治川柳七人集」は渡邊曉童君の編輯で刊行された。▲在間小樓君(本社今治支部同人)は松山へ轉居山井藤生君(同)郷里小松へ歸國の爲め送別句會を三月五日に催された。▲本社竹原支部幹事の町田承春君は郷里松山へ歸省の途次今治支部を訪問さる。▲「吹揚文藝」は三月五日に創刊號を發行、今治市濱町三丁目古川鶴聲方同社より、因に鶴聲君は二月二十五日二女誕生さる。

【秋田】▲秋田川柳は四月號より菊判二十四頁程度の柳誌として躍進さる。

【石川】▲奥田綠水君(金澤の嚴父

吉郎氏)は一月三十日急性肺炎にて逝去されました謹んで哀悼の意を表します。

【島根】▲本社飯川支部は本年九月で創立十周年に相當するので其の記念大會を十月十五日頃に盛大に催す計畫中である。▲杉原朴泉君(飯川支部同人)は大原郡加茂町山根へ轉居、第一信の句「梟の聲さみしけり青だゝみ」朴泉。▲後藤大朗君(飯川支部同人)は郡内荒茅村へ養子縁組、曾田に改姓▲飯川第二支部は飯川支部と合同、幹事は尼縁之助、幹事に北村松濤、尾添好郎、山内凡愚の諸君就任事務所は高松村尼方に設置さる。▲

柳誌「芽生」同「みながみ」の兩誌は合併して三月廿日「潮」と命名の上發行された同誌は松江支部唯一の機關誌として今後の活躍を期待されてゐる同人は山川兒比呂志、笑鬼、梟人の四君で何れも支部同人▲入澤笑鬼君(支部同人)に三月十八日發東京へ遊行さ

れた▲川柳風呂社米江庄介君は同社の主義明徴のため松江支部同人を辭退。▲梶谷巷二君(支部同人)は風邪の爲、奈良井柳人君(支部幹事)は胃疾の爲、廣江天痴人君は脚氣の爲、何れも臥床中。▲松江番傘會では今春を期し十周年記念川柳大會を盛大に舉行の由、仍て松江支部が計畫中の「川柳祭」は暫く延期に決定。▲松崎専太郎君は去月華燭の典を舉げられた。

▲大毎の「變り學コンクール」(5)に水本眞弓君の「川柳戸籍調べ」稿が川柳のため氣を吐いてゐられる。

◆本社支部幹事左の通り更迭。  
神戸支部 喜多 春秋  
磐城支部 岩ヶ池支部 喜多 春秋  
道頓堀支部 江戶みづる  
青木 史呂

◆本社支部幹事左の通り更迭。  
神戸支部 喜多 春秋  
磐城支部 岩ヶ池支部 喜多 春秋  
道頓堀支部 江戶みづる  
青木 史呂

◆本社支部幹事左の通り更迭。  
神戸支部 喜多 春秋  
磐城支部 岩ヶ池支部 喜多 春秋  
道頓堀支部 江戶みづる  
青木 史呂

◆本社支部幹事左の通り更迭。  
神戸支部 喜多 春秋  
磐城支部 岩ヶ池支部 喜多 春秋  
道頓堀支部 江戶みづる  
青木 史呂

# 社 告



## 窓の輯編

柳 汀

◇前月は主幹の病氣や僕の私用忙殺やらで、未曾有の大遅刊をしたのは誠に申譯のない次第ですが漸次挽回に努力を致してありますので何卒御寛恕を祈り上げます。

◇本社四月句會は別項の通り慣例を破つて道頓堀マルタマ階上での川柳観機大會を催します。この近代人向の櫻狩りを兼ねた川柳句筵に皆様多數の御参加を熱望いたします。

◇川柳指導講座は塚越正光氏が

突如東京へ移られて多忙の爲め本號はやむなく休載となりました、御了承を願います。

◇日本名所名物川柳は山川紫明氏と朝倉大鱗壽伯を煩した「京都の巻」をいよいよ本號より發表しました。「四國の巻」は未だ完結していませんので今後は交互に掲載の豫定で居ります。

◇木村半文錢氏の「六厘坊十句再検討」と鈴木小寒郎氏の「佛蘭西俳諧の觀賞」は共に再讀三讀に價すべき川柳研究の好資料です。

◇「さすが大阪」は本誌でお馴染深い紫谷幸二郎畫伯に今回はお願しました。「手紙」は食満南北氏秘藏名家の手紙を蒐めた巻物までも拜借して掲げました珍重のものです。

◇有保證新聞紙法に據る本誌の發行に就いては、柳界に一大セ

ンセーションを喚起さし、各方面の話題にのぼつておます。路郎主幹の叢に述べられた如く、名家の寶刀は安りに抜くべきであります、暫時日本隨一の川

柳雜誌としての足跡を強く印して、われらの川柳殿堂を築いてゆくつもりで居ります。次號を更に御期待下さい。

麻生路郎編著・柴舟漫畫

## 累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入、函三十二葉

定價 壹圓  
定額 拾八錢

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餅にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である。

阪大川柳會編纂・路郎序

川柳句集

頒價 壹圓  
送費 六錢

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。(函六版二〇〇頁)  
本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。残本僅少至急申込みあれ!

所行發

洞朽不

振替 阪大 〇三三二  
電話 茶屋下 二五七九

大阪西區玉出 六三丁目三番地



川柳雜誌社關係の人々

（類はろい）

|                 |                 |                 |                |                  |                 |                 |                 |                 |                  |                  |
|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|
| 鳥取支部(鳥取市)幹事中島鐵州 | 京都支部(京都市)幹事明石柳次 | 鎌川支部(島根縣)幹事尼綠之助 | 田邊支部(和歌山)幹事辻左馬 | 螢ヶ池支部(大阪府)幹事碓流之介 | 梅田支部(大阪市)幹事水谷鮎美 | 高知支部(高知市)幹事國澤春水 | 兩館支部(函館市)幹事龜井辰修 | 神戶支部(神戶市)幹事喜多春秋 | 九三會支部(大阪市)幹事北山悟郎 | 道頓堀支部(大阪市)幹事青木史呂 |
|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|

|                 |                  |                  |                  |                  |                  |                |                  |                  |                 |                  |
|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|----------------|------------------|------------------|-----------------|------------------|
| 松山支部(松山市)幹事酒井大樹 | 御旅支部(大阪府)幹事江戶みつる | 天王寺支部(大阪府)幹事須崎白峰 | 鶴岡支部(大阪府)幹事西岡いづる | 御池橋支部(大阪府)幹事宮内わを | 松江支部(松江市)幹事奈良井柳人 | 塗青支部(大阪府)幹事熊谷紅 | 大鐵局支部(大阪府)幹事植山九天 | 西條支部(愛媛縣)幹事荒井英賀夫 | 光耀會(大阪府)幹事増位勇多子 | 今里支部(大阪府)幹事市場沒食子 |
|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|----------------|------------------|------------------|-----------------|------------------|

上町支部(大阪市)幹事廣原都會人  
今治支部(今治市)幹事月原宵明  
光笑會(大阪市)幹事永田里十九  
新居濱支部(愛媛縣)幹事木村默紅  
伯耆支部(鳥取縣)幹事三鴨美笑  
竹原支部(廣島縣)幹事町田承泰  
藏川第三支部(島根縣)幹事後藤大朗  
市岡支部(大阪府)幹事平井春光  
十三支部(大阪市)幹事淺野牧人  
臺中支部(臺灣)幹事宮內耕朗  
兵庫支部(神戶市)幹事濱田久米雄

池澤樂居  
長谷川一徹  
岡本弘雄  
片岡直平  
笠原路生  
嘉納辰純  
長崎柳  
長岡半太  
長野晴濱  
國枝史郎  
松本研三  
藤村卯之助  
藤本卯之助  
額井原退藏  
赤井清司  
淺田一

客

|     |      |      |      |       |       |      |      |      |     |      |      |       |      |      |      |   |       |
|-----|------|------|------|-------|-------|------|------|------|-----|------|------|-------|------|------|------|---|-------|
| 前田健 | 安川五郎 | 窪田銀波 | 谷脇素文 | 田村孝之介 | 米村あん馬 | 川村三花 | 川上三太 | 龜井晟修 | 小川武 | 岡田三子 | 大西長三 | 大谷五三郎 | 大島濤明 | 鳥山一步 | 伊藤彦造 | 員 | 末弘嚴太郎 |
|-----|------|------|------|-------|-------|------|------|------|-----|------|------|-------|------|------|------|---|-------|



森小藤蛭篠榮食  
人林里子原谷滿  
不浪好省春南  
東浪好省春南  
魚人古二兩郎北  
路郎  
柳食民  
柳根  
曾沒  
崎場  
石市  
石原  
岩石  
森小  
藤蛭  
篠榮  
食

眞青明阿江後近朝福松熊村中竹立吉岡岡丘  
田木石形戸藤藤田田小谷松澤西内井川田田  
幸史柳一つ青新鶴柳夢濁見美啞水某遊  
捐呂次杉兒勇水峰子紅裡水女坊人車人舟

同

|                   |                   |         |
|-------------------|-------------------|---------|
| 人                 | 首須關妹毛廣廣東日姬平平平平宮喜北 |         |
| 藤崎本尾利原田谷野田井井井井岡多山 |                   |         |
| 竹豆雅變九會六開華夕三春蒼鮎白春悟 |                   |         |
| 楓秋幽人波人浦路水鐘郎光太美峰秋郎 |                   |         |
| 主                 | 支社長               | 編輯局(同人) |
| 麻生路郎              | 福田山雨樓             | 庄萬よし    |
|                   | 住田亂耽乃             | 永田里丹    |
|                   | 麻生位汀柳             | 高橋かほる   |
|                   | 增本雨迷樂雨            | 春元紀太夢   |
|                   | 山田艸綠雨             | 生田翠夢    |
|                   | 橋本綠雨              |         |
|                   | 西田艸綠雨             |         |
|                   | 山田艸綠雨             |         |
|                   | 增本雨迷樂雨            |         |
|                   | 麻生位汀柳             |         |
|                   | 住田亂耽乃             |         |
|                   | 福田山雨樓             |         |

編輯局（同人）





# 投稿規定

- ▲投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問答はすべて返信料封入の事。

## 募 集

### 第十三卷第七號課題

五月五日締切

(各題十句以内)

- ▼湯上り 高橋 かほる選
- ▼金魚 西村 明珠選

### 第十三卷第六號課題

四月五日締切

(各題十句以内)

- ▼舞妓 生田 翠夢選
- ▼電車 水谷 鮎美選

### 每 號 募 集

- ▼近作柳樽(雜吟) 麻生 路郎選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想行漫文)

## 社 告

社務一切は事務所宛

## 價 定

- 一 部 金參拾錢
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

## 料 告 廣

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▲御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▲誌代受領は送金によつて御承知願ひます▲送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも預ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▲御注文には何月號よりと御指示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▲川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十一年三月廿五日印刷

昭和十一年四月一日發行

第十三卷 第四號  
(毎月一回一日發行)

## 有保新證保無禁

刊行法紙聞新證保無禁

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二 郎  
大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地  
發行所 川柳雜誌社  
電話天下茶屋二五七九番

事務所 川柳雜誌社  
大阪市天王寺區上沙町一丁目五一番地

支社 東京市蒲田區女塚町一三七番  
電話大阪七五〇五〇番

## 店書捌賣

- (大阪) 大賣捌大賣書店、明文堂、其他市内各書店
- (東京) かん、東京堂、かん、巖松堂、かん、吉岡書店、かん、玉森堂、かん、紀伊國屋、かん、三味堂(神戸)、米田、寶文館(函館)、石塚(京都)三宅(名古屋)靜觀堂

健康の創造への第一歩

# モリカワ グルコース

固形葡萄糖

ハイキング、登山  
スポーツ等の心身  
疲労恢復、病中病  
後、産前産後の營  
養補給、小兒、老  
人の虚弱者の健康  
増進

モリカワグルコースは日常茶葉同様  
に攝取出來る内服的固形葡萄糖で世  
界的の優秀營養劑であります。御承  
知の通り葡萄糖は人體にとつて生命  
の綱とも云ふべき重要な營養素であ  
つて從來醫家の手に依つて注射をし  
て居たのであります。これが簡単に  
口より攝取出來る様になつたのであ  
ります。

大阪市住吉區北邊町一六  
林道藥部  
電話四二七九  
大警五二九三

藥價  
一ポンド入 二、五〇〇  
半ポンド入 一、五五〇  
五ポンド入 五、五〇〇





榎林医学博士推奨  
片瀬医学博士監査

安産のために

ブカルシウム錠

片瀬医学博士述「安産のために」進呈



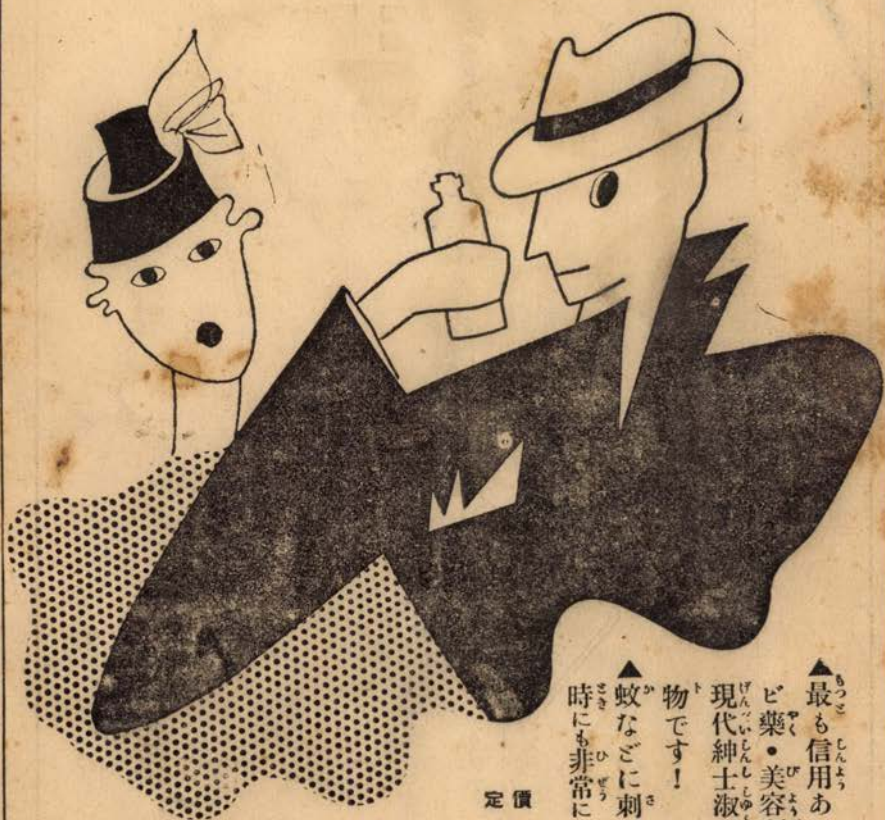
元 売 發

店商助卯田和 町修道 阪大

# 水顔美びきにと

うせまりこそ物<sup>もの</sup>の出<sup>で</sup>吹<sup>ふ</sup>きびきに

うせまりなに麗<sup>うつく</sup>綺<sup>り</sup>らか地<sup>ち</sup>生<sup>せい</sup>



▲最も信用あるニキ  
ビ薬・美容劑！  
現代紳士淑女の愛  
物です！  
▲蚊などに刺された  
時にも非常によし！

定 價  
.30  
.50  
1.00

館 天 順 谷 桃 會 社 舖 本